
ウチの倉庫の地下に神殿がある件について説明を求む

スリザス

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウチの倉庫の地下に神殿がある件について説明を求む

【NZコード】

N9140Z

【作者名】

スリザス

【あらすじ】

前世が日本人で異世界転生したが、村八分で貧乏極まって自殺寸前。

そんな悲惨な境遇の開き直り型主人公がひょんなことから幼女な神様の使徒に。

色々な能力を貰つてダンジョンで暴れまくり、治癒能力やアイテムで怪我人や病人を治したり、商売をして優秀な部下を得て、領地を手に入れて内政したりして活躍する予定。

しかし元の村ではあい変わらずつまらない村人たちに迫害され続け

る物語。

ただの暇つぶしの殴り書き作品です。
ハイリスクノーリターンノークレームの軽いノリでお楽しみください。

よく小説とかで転生とか生まれ変わりとか聞くけど、俺はそういうものは信じていなかつた。

死んだら人間はそれまで。赤子でもわかる真理のひとつだ。

大体にそんな誰もかれもが生まれ変わっていたら、何十代もの大昔の記憶とかが延々と残つててまったく思い出さないとか実際おかしいだろ？

まあそれ以前に記憶は脳にあるもので、生まれ変わりで前世の記憶とかがある方がもつとおかしいと思つんだが……

何が言いたいかといつと……

「何で俺に前世の記憶があるんだよー」ってことだ。

前世の記憶、俺が日本という国に生まれ、牛丼のサンボでワンコインで大盛りを頼み、そして暴走トラックに撥ねられて死んだまでの人生の記憶。

気楽な小説の中では転生なんて好物ですかと言われてそうだが、自分で経験してみるとこの記憶は今の世界、なんというか異世界っぽいところでは邪魔モノでしかなかった。

何しろ赤ん坊の頃からほんやりとだが自我があつた。そのせいで日本人としての精神ではちょっと耐えにくいようなことが次々と経験させられ……

生きてる芋虫を食べさせられたのはカルチャーショックどころではなかつたよ。今では気にせず食べられるけど。

他にも笑わない子とかのレッテルをつけられ、下手に日本語の下地があるおかげで言語の習得が平均よりだいぶ遅れたり、素直に子供として振舞えないから何を考えてるかわからないとか裏で何してるかわからないとか、西洋人が日本人を、田舎の人間が都会の人間を表現するような評価をいただきまくつたり、色々と酷い人生を送つてしまつた。

日本人の知識を利用してチートしまくり?

まったく無理。

といつか無理。

絶対無理。

ちょっと考えればわかると思うが、清く正しいヘタレ日本人が中世レベルのところに転生して幸せに生きられるかと。

ほんのちょっとでも周りと違うことをするとすぐ注目される。その

注目つてのも悪い意味での注目だ。いわゆる魔女裁判のよつたな雰囲気になる。

算術が出来れば就職できる?

就職が出来るのはお偉いさんの身内とのじ機嫌をひたすら取れるクズのみ。

むしろ高度な能力なんて見せたら、拉致されて奴隸として高値で売られて一生無償で働かされるだけだ。

こじら辺のクズさ加減は、前世の世界となんら変わらない。

出来る」とと言えば周囲と同じことをするだけ。

それも力仕事ばかりで理系人間の俺にはついていけず、無理をしきて半病人のような状態で今まですごしてきた。

ま、その話は今は置いておいてもかまわない。ぶっちゃけ今そんなことを気にしてる状態じゃがない。

わかりやすく言つと「村八分されてて、親が行方不明で、我が家の経済状態が最悪で、体調も悪くて、夜逃げ寸前だけ逃げる場所も無い」という感じ。

左手に首を吊るロープがスタンバつてるんだ。

あまり仲が良いとも言えない両親は、半年前に一人で王都に出稼ぎに行つたがそれ以降なんの連絡も無い。

兄貴がいたが俺が5歳のころに魔物にやられて死んだ。

つまり身寄りが一切無い。

「おわた。人生またおわった。神様つまらない人生をありがとう」

でも最後になんか美味しいものでも食べたいな。

裏手にあるみすぼらしい倉の中から売れるものとかを物色するか。

どうせ売るのも面倒になるような値段の「△△△」しかないんだらうけど

ね。

今までダルくて調べなかつたような物資もすべて調べまくるために、荷物は全部外に出すようにする。

かなり大掛かりな物色だ。子供の頃から探検みたいに何度もしているが流石にここまで大げさにしたことはない。

何か良い値段で売れるものであれば……と期待はするが、内心では殆ど諦めている。

今こいつして倉庫を調べてるのも、結局は情性みたいなものだ。

でもま、何もしないよりは気が晴れる。

そしていくつかの剣や籠手やらのあまり高価でなさそうな冒険者用の装備以外はボロ布や木製のガラクタなど大したものも見つからず、最後の荷物を調べる。

「何だこの箱、重すぎる。いや、これ床に引っ付いてるのか」

動かそうとしたときの感覚が、重いものとしては何か違和感を感じる。

中がまるで空っぽのような感じの頑丈な木箱の蓋を開けてみると予想外に軽く開いた。

「なんですか、コレは……」

どう見ても階段。

斜め横から見ても上から見ても階段。

多分、前と真横からだと木箱にしか見えないが。

おそらく地下室へと繋がっているんであろうと思われる階段の奥は、光ゴケでも使われているのかボンヤリと明かりが見える。

いつたいその先に何があるのか。

予想その1はお宝がザックザクと。あるわけないだろと自分でツッコミられるが。

予想その2は親父の隠し酒蔵だが、隠す意味あるのか微妙？

予想その3は迷宮。うちの倉はダンジョンの上にたつていた！ わけないよね。

危険があるかもしれないの、見つけた装備を適当に身につけてから降りることにする。

「さて、鬼が出るか蛇が出るかいっちょ行ってみるか

「うおおおおおおおお、凄いなこれ」

階段は予想以上に狭くて長かったが、特に問題なく最深部まで到達。

100畳以上あるような広さの部屋の入り口から中を眺めると、高価な明かりの魔道具によつて煌々と照らされる純白の石つくりの壁面、そして中心後ろよりに設置された莊厳なつくりの祭壇。

そこはまるで以前にクラスの取得のために行かされた神殿のような雰囲気がする場所だった。

ちなみに取得したクラスは 村人F である。村人にもランクがつてFは貧民みたいなものさ。ハハハ。

あまりの光景に数分ほど呆けていたが、とりあえずお邪魔しますと小声でいいながらオズオズと部屋に入つていく。

入り口からもみえていたが、祭壇の御神体はどうやら女神様のようだ、槍を持った凜々しい戦乙女のような大きな彫像が異彩を放つ。

祭壇への緩い階段を昇ると、その御神体の大きさに圧倒され、まるで実際に神様の前に連れられて右往左往するちっぽけな人間のような感覚になる。

そんな雰囲気に流されてではあるが、唯一知っているこの世界での神への祈りの聖句を思わず口ずさんで祈りをささげる。

「いあ いあ くとうるふ ふたぐん!」

そして何かわけのわからない達成感を得つつも、いつたん今後のことを考えるために帰るうと祭壇を降りると、視界の隅のテーブルのよつな場所の上にさつきまでは無かつたはずの彩りが見える。

「ん? なんだ?」

一見してみると果物や肉、つていうか食料に見える。一応近づいてみるとやつぱりなぜか食料が山盛りに置いてある。しかもかなりの高級品ばかりに見える。この世界で17年生きてきたがいつも芋と雑穀と野草ばかりで、ここまでの高級品はそう何度も食べた記憶すらない。

「これつてもしかしてお供え物だよな。でも誰がいつの間に持つてきたんだ、さつきは絶対に無かつたはずなのに」

せつこつて姿形がリンゴもどきのティーアゴと呼ばれる果物を手に
とつて見る。

（「へーん、凄い良い香り。すみません、もつ我慢できません）

空腹もあこまつて、つこつて口に運んでしまう。

大きなティーアゴにかじりつくり、リンゴとオレンジの合わせた
ようなみずみずしい味が口の中広がって、久しづりの美味に歓喜
が生まれる。

それからぼもつ、俺は飢餓感に押されて壇が切れたよつて完全に無
心のままひたすら涙を流しながら貪るよつて食い漁つた。

そして腹も膨れてもう食べられないといった状態になると、途端に
正氣を取り戻す。

「俺はなんてことを…………神様への供え物を横取りとか、神罰下
るわ…………」

しかし何でこんな隅のまづに供え物が置いてあるのか。

普通は祭壇の方に供えるはずでは？

もしかしてお供え前にいったん置いてあるだけか？

とつあえず食べてしまつたからには仕方ない。

俺は開き直つてはみたものの、『のままやつてしまつた』ことを捨て置くには堪えられない心境だつたので、自分なりの誠意を見せようと、まだ半分以上余つていい食料のうちのいくつかを見繕つて抱え、

「すみません、神様。お供え用の料理を作つてしまります」

と、一応逃げるわけではないと宣言をしてから階段を上がつて家にまで戻る。

そして台所の竈に火を起ししながら、作る料理の内容を決めていく。

(燻製肉は塩気が強いからこのままじゃ食べにくいだろ。なら削り取つてスープのダシにしようか。後、この粉物はパンを焼こうかな。日本で食べたような柔らかいものは無理だろうが焼きたてはおいしいはず。それとこっちの野菜は干しキノコからダシをとつて浅漬けにしてみようか)

和洋中華がじゅぢゅあぜだが、もつ氣にしない。

第一、日本の定食屋のメニューとか弁当とかもそういう部分はめちゃくちゃだつたし。

感性が日本人なんだから仕方ないだろ？

元日本人舐めんなよって意氣だ。

そして今まで材料すらなかつた為に発揮できなかつた日本人としての食への拘りをフルに発揮して渾身のメニューを作り上げる。

「出来た！ これが俺の究極のフルコースだ！」

まあそこまで言つほどものでもないが、日本人としての感性で作つたから、この世界でのまことに食文化からは多少は逸脱したものが作れたはず。

特にさつき味見した、白身魚のフライのタルタルソース添えとかはこつちにはまず無い料理で絶品である。

一応来客用の食器に盛り付けたがやはり供え物としては食器が微妙に見える。

だがせいいっぱいの努力はした。

後は冷めないうちに持つていくだけだ。

祭壇の部屋への階段を足早に降りていくが、何故か普段より体調がよくて足取りが軽い。

おやりくあの時たらふく食べたせいだと思つ。

栄養素が足りなかつたんだろうな、色々と。今までのあまりの自分が貧しさに今更ながら呆れてくる。

前に聞いたことがあるが、日本人は昔は寿命が50年だったらしい。

それだけ食べ物つてのは体調に直結する。

それに未開人は薬が異常に効きやすいってのとかも関連して、必要な栄養分が色々と足りなかつたために今回過剰に体調と栄養摂取が直結したんだろう……

「お待たせしました。神様」

返事がかえつてくるはずもないが、一応気分として口に出しながら祭壇の台の上に料理を捧げる。

そもそも殆どの宗教が、返事もしない神様に祈りをささげてのだから俺がこうして神に語りかけても可笑しいと言われる筋合いも無いだろう。

「神様の為に精一杯がんばつて料理をさせていただきました。気に入つてくださいましたら先ほどの無礼はどうかどうか水に流してくださいよつね願いします~」

大げさにジエスチャーを加えながらひたすら口くち譲る。

「で、では、」ゆづくつ

なんだか態度にレストランのウエイターとか怪しいホテルの従業員とかが若干混じっているようだが、気にせず強引にします。こういつのは勢いが重要なのだ、そうに決まってる。

とつあえず逃げ帰るように部屋の入り口のまつまつ後退した俺は

祭壇のところに設置されている高さが人の背丈ほどもある鏡、いわゆる姿見から

なにやらちんまい幼女が、じく自然と現れて、俺の作った料理をパクつとほおばるのを

見
た

えええええ、なにしてくれちゃってるのこの幼女は。

いや、といつかむしの娘が神様？

た、確かににか神々しい感じはするけど、御神体とかけ離れすぎだろ？

身長とか、特に胸のボリュームとかがA - カラエ + までかけ離れてる。どっちがA - かは察しい。

とつあえず状況把握の為に祭壇そばまでにじり寄る。

特に警戒される様子もなく、なんといつか緊張感の欠片もなさやつな雰囲気だったので更にそばまで近寄った。

じぽれるような無邪気な笑顔でこちりを見つめる女神様？

近くで見ると、あの有名な 赤さんの成長後 と謳された写真の美

少女のよつな顔立ちである。実際は違うのが。

「ひらは金髪、いわゆるブロンドヘアだけね。

あ、ほっぺにタルタルソースついてる。

「え、えーと、お味のせつばでしょつか？」

「おこしー！」

「や、そうですか」

「おいしいね、これ～」

そつこつてちんまい女神様が食べてるのは俺の渾身の作である、白身魚のタルタルソース添えだ。

あ、今度は鼻の頭にタルタルソースがついた。

「お兄ちゃん、料理上手なんだ？」

これは、この眼はあれだな。よく小学生とかに一発芸とかを見せる
と妙に興奮してウケられて、そのまま尊敬されもみくちゃにされ、
おまけに膝を蹴られまくるアレだ。

「えーと、はー……ありがとー。」

天使のような笑顔でパンにパクつく女神様。

ダメだ……あまりの状況に俺の頭はパニック寸前でどうにも事態の把握が不可能である。

この状況は、これからいつたいどうすれば良いんだ……

解決の糸口になりそうなこの幼女は食事に夢中で会話になりそうもない。

とこりか、この無邪気な笑顔には、色んな質問とか小難しい理屈とかがまるで通用しそうに無い。

ぶつちやけて言うなら、手持ち無沙汰でこの場に居るのが苦痛である。

もうわあ、この幼女様が食事に一息ついたらストレートに聞いてみるしか方法はないんじゃないか。

とこりわけでしづらべかーかーとしながら（チクチクと刺されるような心地で）まつてみて、じるりんといつタイミングを計つて聞いてみた。

「あ、あのー」

「なーーー?」

「もしかして……貴方が女神様ですか?」

「うふーーー!」

「おおお、やつぱつ。あまつこも御神体とあんなことか……」

ヤバっ、最後のほうとか小さな声で言つたのに、今一瞬幼女様の眼
が凍つたように見えたよ。この話題は禁句ですね。

「そ、そ、うだ。実は先ほどあそここのテーブルに置いてあつた食料を
わたくしが食べてしまいまして。この食事の材料もそ、うなんです
けど。その節は大変たいへん申し訳ないことをいたしまして……」

「……」

俺は使い慣れないへタレな敬語を使つて、深く頭を下げて素直に謝
つてみた。が、

「あのテーブルの上? はお兄ちゃんのものだよ

「は？」

「だからね～、ここでお兄ちゃんがユニユーンとお祈りを捧げると、神様パワーが充電されて、あそこのテーブルにジュバッと神の実りが出てくるの」

「神の実りとはナンデスカ？」

「信徒へのぶれせんと？」

「えええ、なんという太っ腹な。神様つて信仰だけ要求して何もくれないのが普通なんじや……」

「それ神様じゃなくて多分悪魔だよ～、『悪魔を信仰してると世界に醜い争いが絶えない』ってたしかお姉ちゃんが言つてた」

「な、なんだつてえええええ」

「20年ぐらい前にこの辺りに来てね。バッシューンってこの神殿を作ったみたいで、その後はお風ねしてたの~」

俺はあれから素直にこの幼女様の話を聞き入ってる。

この祭壇の部屋は一応神殿だったようで、しかし神様ゆえのあまりの気の長さからか、作った後は興味を失い放置されて、そのまま20年ほどだらだらと寝て過ごしたそうだ。

それが今回俺が祈りを捧げたのをきっかけに眼が覚めて、更に美味しいそうな匂いがしたのでこつそり実体化して食べにきたそつな。

しかし何でこんなド田舎の地下深くの田立たなことこりて神殿をとと思って理由を聞いてみたのだが、「えへへ」と笑つてはぐらかされてしまった。なんとなくだが明確な理由がまったくなさそうに思えるのは俺だけだろうか。

もしくは思いもよらないようなとんでもない理由があるかもしれない。ほんとは無いと俺は思つてゐるけど。

少し考へにふけつて幼女様から眼を離してはいたが、気がつくとじつとそれこそ穴が開くような視線で俺を見つめている。

なんというか、これは、尋常じやかない気配が漂つてゐる。

俺は思わず身をすくめる。

なりは小さくても幼女様は女神様、それを忘れてはいけない。

「すいーい、お兄ちゃん、珍しい記憶持つてるね

「ー。」

まさか、俺の前世の記憶を
読まれた？

「日本？ ジャパン？ ジャボニカ？」

「ジャボニカは違つ。学習帳。いや、違くはないのか

なんだらつ、いきなりシリアルス成分がめっちゃ大げさに吹っ飛んだ
気がする。

つい死んだマグロの眼をして それはないの A A みたいな感じで
手を振つて否定してしまつた。

刷り込まれた習慣というものはホント恐ろしい。

「さつきの料理はお兄ちゃんの故郷のものなんだね。わたしました食べたいな~」

「うーん、でももう材料がそこまでないから。材料さえあれば一応は作れます」

「なら今から出でたり? 祈りの聖句を私に唱えて~」

「聖句ってあれですか、ぶっちゃけ本当は聖句は知らなかつたもので前世でのを適当に唱えてしまつたんですが」

俺は冷や汗をだらだら流していのよつな心情で、まさしくぶっちゃけてみた。

「大丈夫。凄い祈りの力が感じられて、神様の力も沸いてきたからー！」

「じゃ、じゃあ、やつてみますね。失敗しても許してね

「お兄ちゃん、準備いいよ~」

「では失礼して ていび まぐぬむ いのみなんどうむ しぐな すてらるむ にぐらるむ え ぶふあにふおるみす そどくえ しじるむ ……」

「凄いパワーが来てるよー 後は任せて！ ぱしちつだよ」

その時、視界を真っ白にさせたまばゆい光が！ なんでもなく、ただ例のテーブルに視線を向けると、

テーブルとかまったく見えないぐらい食料品で埋まってるし。

てか、あれに見えるはレトルトのカレーじゃないか？ なんでもなんも混じってるのよ。

他にも日本製品らしきものがいくつか。メイドインジャパンきたわあ。

「凄い、凄い、いっぽいでた」「

「ちよつと出すぞ」と思われますが

「これちよつとお兄ちゃんの手料理が食べれるね！」

キラキラとした眼で期待されてしまつたが、しかし俺は、

「うーん、多分それは無理……」

「え？ 駄菓子なの？」

「いや、実はこれから自殺しようとかとおもつてたり」

えつと、あまりのことに幼女様がぽかーんと口を開けて呆けています。

俺は今までの事情をとりあえず幼女様に説明することになった。

「うう、うう、お兄ちゃん可哀想……」

なんか自分が泣かせてしまつたようで罪悪感がハンパない。

「どうわけでも生きてるのも無理かもしないんだ。まあ祈りで食料が出せるなら食いつなぐことは出来るかもしねりけど税金とか払えないし」

「む」

「それと食料とかを売ろうとしても大量には無理だと思つ。村の中で売買用のルートが決まって不自然に多く売つたら怪しまれて、相場を崩した罪とか言われて商人どもにどんなにあわされるのかすらわからないんだよ」

「む~」

「む~……」

「あつ、だつたらー、お兄ちやん、使徒になつてみない?」

「むむむ? 神の使徒ですか……また随分と大事に」

「うん、多分お金も稼げるし、三食寝付きだよ」

「なつ、じこでせんな言葉を(まあ予想はつきました)……えつと、お願ひします」

「わ~い。使徒げつとだよ~」

「げつとされました」

「晴れて神の使徒となつたわけですが」

「ですが~」

幼女神様はニコニコと笑つて相槌をうつっています。

なんていうか、イイね。こうこうのは。

あまりにも荒んだ生活のせいで忘れてた感情が湧き出でてくるようだ。

「私はなにをすればよいのでしょうか? 使徒として

「美味しいものを作つて!」

「とりあえずよだれは拭きましょ~。幼女神様。
後、それ使徒の役目違うか。」

「いや、それ料理人というかコックというか

「『』飯、『』飯！」

幼女神様の背後に、勢いよく振られる小犬の尻尾のようなものが見えような気がするのは錯覚であろうか。

やるせない思いを抱きつつ、まずは溢れかえった食料品をチェックする為に下に降りる。

正直このままでは俺が食われそうでやばい。

手早く食べられてしかも美味しいものを見つけ出さなくては……

「幼女神様、これなるは桃缶でござります」

「桃缶~」

幼女神様は、高級な缶詰によく見られるペナペナのカバーっぽいのをペコペコと押して遊んでおられます。

なんとこつ可愛らしやー。

爺は爺はー。

ひとつノコツシ ロリは空じーからやめるといへ、

「食べてみましょつか？ しかし、れは冷やすと更におこしゅうひじります。ですが冷蔵庫などはございませんから難しこうひですね」

「冷たくするとおこしの～？」

「はい。それはもう格別に。爺やに魔法が使えれば冷やしておしあげるのですが、残念ながら爺のクラスは 村人F だけで御座いますゆえ」

「えいー！」

「ああつ、何をなさいます、お嬢様！」

なんだこれ、シビレハ どじびれて……

ああ、やつぱお嬢様と爺やF ははウザつたかったのか？

そして俺は意識を手放した……

「でも3秒で回復したわ」

「お兄ちゃん、もう魔法が使えるよ？」

「何ですとー。」

「そう俺はさつきの痺れでなんと、桃缶の魔法使いになつていた。もとい魔法使いのクラスを得ていた。」

「まだいまいち実感が無いのですが、さっそく魔法を使って冷やしてみることにします。」

「わーい、パチパチ

ちなみにこっちの世界、村人でも一応魔法は使える。

3時間ぐらいウンウンうなつてると蠟燭の炎ぐらいの火がボーッと0.5秒出るぐらい。

……うん、役立たずだよね。

やっぱ魔法って憧れるから、結構練習はしたんだけど、どうやら詠唱とか技術とかよりもイメージ力とかクラスとか才能がものをいうらしくて、役に立つ程度のレベルにすらならなかつた。

しかもこっちの世界では魔法が使えるゆえに、科学文明の発達が遅れているという有様。

まあそうだよね。大体に現象に対しても魔力とかで計算していく結果

が出るのなり、しつかりした検証結果を必要とする科学とか発達しないのは当たり前。

とつあえず、氷の魔法……は、カチンコチンになると食えないし、流水の魔法……冬の川のイメージで……いや、これも水浸しになりそう。

ならば冷凍庫に30分ぐらい入れたときの、缶の表面に軽く霜がつくイメージが丁度いいかな？

「桃缶よ。我が意に応え、冷たくなあれ！ BE COOL！」

おおお、なんか今までに無い感じで魔力が湧き出していくのがわかるー。

これが役に立つレベルの魔法の感覚なのか。

普段はジョボジョボとホースから水が出てるのを、ホースの先を指で潰して、勢いよくペューッっと出させのような感じ。男なら誰でもわかるアレだ。

それが右手に持った桃缶にまとわりついて、世界を変革していくのが手にとるよつて感じられる。

たちまち、その手のひらには冷凍庫から取り出したばかりのような冷たさがビンビンに伝わってくるよつた。なつた。

「やりました。お嬢様、程よい冷え加減でござります。さつそく開けてみますね」

「正字_二」

「ほつ」

ブルトップに爪を引っ掛けパコッと開けると、ほのかに甘い匂いが漂つ。

「では、まず爺やが先に味見をしてみます」

一
え
一

「おお、これはまたたりとして戻ヶがあって滑らかで……」

む――む――！」

「白桃とシロップの冷たさが共に絶妙。口の中に含むと桃源郷に迷い込んだ気分です」

ଏହିପରିବହନକୁ କିମ୍ବା ଏହିପରିବହନକୁ କିମ୍ବା

「なんとこゝの至福。まるで秋山の魔法にかかりたかのよつてー。」

「えい！」

「ああっ、ガガガ、シ、シビビれれれ」

「ふーんだ！」

「こ、これはもしかしてさつものおおお。まままさかまたもや新しいクラスを手に入れちゃつたりしかやりますかがががが？」

「うひうひ」

やつぱねつですかよな。うん。

第6話 狡猾

幼女神様は只今二口二口と笑顔で桃缶を頬張つて、といふか桃缶の中身を頬張つています。

しかし油断してはいけません。

私は前回知つてしまつたのです。

この方が案外でんじやらすな性格をしていることを…

「では、わたくしめはいつたん住まいのほうへ戻らさせていただきます。これからも料理を作るために色々と準備する必要が御座いますので」

「うん。はやく戻つてきてね」

「出来るだけ努力はいたしますが、なにしろ色々と問題が山積みでして3時間ほどはかかるかもしれません」

「じゃあ、行っちゃダメ」

「…………」

でたよ、子供の我がままが……

『はやく戻ってきてね』と『行つちやだめ』の「コンボに微妙に萌えたのは内緒だが。

といふが、我がままが可愛いのは非力な子供がやるからであつて、神様にやられるとホントやばいよね。色々と。

仕方ない、ここは俺の老獴な会話テクニックを駆使して見事に切り抜けてみようか。

「お嬢様、今から上にいって、まさしく舌がとろけるような甘くて美味なるものを作つてまいりますゆえ、戻つてくるまではお待ちいただけますか？」

「行つてらつしゃー！」

ふつ、ちゅりいな。

「では行つてきます。帰つてくるまでに口寂しくなりましたら、こちらの袋に入つたポテチなるものを食してください。パリパリとした食感が面白く、中々の美味しいで御座います。ただし食べすぎには注意ですぞ。2袋までにおさえますよつこ」

「ん、わかつた～」

幼女神様に手を振られつつ、ようやく切り抜けたと内心思いながら、俺は選び抜いた食材を両手にござつさつと抱えて自らのアジトへと足を運んだ。

「さて、甘いものを作ると言つておいたから、いくつか用意はしておかないと。しかし基本的な調味料まであったのは幸運だな。これで色々と日本のメニューを再現できる」

そうなのだ。あの食材の中には、塩や砂糖のみならず、醤油や味噌、その他色んな調味料まで入つていたのだ。

ちなみに植物油は最初の食材の中にもあった。

ただ生クリームとかバターとかは今回は見当たらなかつたので、お菓子を作るのにも制限がかかる。無理をすればミルクからも作れそうだが今は機材も無いし、量を作りにくい。

そこでミルクと苺と砂糖が揃つてることに味付き、一品田のメニューは自然と決まった。

日本人ならおなじみの苺ミルクである。

作り方としては苺を潰してミルクをぶつかけて砂糖で味付けという

案外簡単なデザートだが、これは素人の作り方。

苺とミルクと砂糖が織り成す至高のハーモニーはこの方法では生まれ出でえないのだから。

完成した際に、苺の部分とミルクの部分、それぞれが絶妙な甘みを独立して持つてこそ本当の苺ミルクなのだが、多くの人間たちは砂糖味のミルクに苺を漬したものと混ぜただけのものを苺ミルクと崇拝してしまっている。

結果として、ミルクの人工的な甘味と自然な甘酸っぱさの苺が、甘いだけの苺風味ミルクとひたすら酸っぱく感じられる苺部分とへ味が分離してしまったのだ。ハーレーションを起こしてしまって、至高どころかただ癪癩を起こして暴れる困ったおっさん風味の味へと堕ちてしまつ……これは絶対に許せない。

まあ実際には あまおう などの高級な品種を使えば苺がミルクの甘味に負けずにそれなりのものは出来るのだが、苺ミルクには安物の苺を使うということは宇宙の真理であり、それに反することは恥ずべきことなのだ。そうに決まつてゐる。

そこではまずは苺の表面の甘い部分のみをスプーンなどで削つて分離させる。量的にはそこまでなくともいい。これはよく苺のムースなどで飾り付けに用いられる苺の部分に相当するのでバランスが重要なのである。次に苺の芯と残りの苺をミキサーにかける。ちなみにミキサーは俺の手作りだ。そこに砂糖を程よく加えてそのまま数時間置いて馴染ませる。

その間に削つた苺の赤くて甘い部分を、少な目のミルクとおおめの砂糖を加えてあえておく。イメージとしてはこの部分のみで練乳をかけた苺の味に仕上げるのだ。こうしてしばらく置いたまま、最後

に両方を混ぜてミルク部分の砂糖を調節して出来上がる予定である。

さて、次は何をしようか。

もう一品作る前に、ふとくらとしたパンを焼く為の天然酵母でも仕込んでおくか。

せつじて作業は弾み、3時間は瞬く間に過ぎていったのだった。

カツカツと靴音を慣らじて、祭壇の部屋への階段を降りていく。
勿論、両手には至高の母ミルクを筆頭にいくつかの「ザート」がのつたトレイを持っているのである。

「お帰りなちゃい〜」

満面の笑みで迎えてくれる幼女神様。おお、なんと神々しい……

しかしセレード俺はある異変に気付いた。

前は10袋はあつたはずのポテチの袋が、何故か今はどこにも見当

たらないではないか。

「食べてない」

「…………」

「食べてないもん」

「…………」

「お糞が生えて、飛んでいっちゃったの」

「…………まあ」

「食べたんですね……しかもポテチをぜんぶ」

「食べてないもーん」

幼女神様は誤魔化す姿勢を曲げるつもりはないらしい。ナント嘆かわしい。

教育係として任されてから早10年、このまま性格が歪んだ女神様に育つてしまつたら、亡くなつてしまつた旦那様と奥様に爺やは顔向けできませんね。

「本当ですか?」

「ホント……」

ふむ、言動が小さくなる事や細かい態度などからみに多少後ろめたさはあるようですが、

更生の余地はあるようですが、なにばらし話をふりをかけてみましょうか。

「お嬢様、わたくしめはあれらを全て食べてしまつたことを責めて
いるわけではないのです。むしろお嬢様の身を案じているからこそ、
眞実を話していただきたいのです。もし食べてしまつたのなら本当
にほんとうにホントーウに大変なことがお嬢様の身に降りかかるの
です」

「え……」

「お嬢様、気を確かに持つてよく聞いてください。まず第一にあれらはジャガイモというイモ類から出来ています。イモ類は炭水化物という過剰摂取によって脂肪になりやすい栄養素から主に成り立っています。つまり太るのです。しかも悪いことに胸ではなく二の腕やお腹がです」

「ウニ...」

「次にカラッと揚げるのに植物油を使用しています。これらは脂質です。こちらも基礎栄養素の中では非常に脂肪になりやすいもので注意が必要です。つまりめっちゃ太るのです。それはもう見事なほどに」

111

「そうそう忘れていましたが、イモ類は腸の中でガスが発生しやすく、大量に食べてしまうと……淑女としては恥ずかしいことにおならを撒き散らすマッシュスユイーンになってしまいます。それはもうブーブーと……」

「え……」

「特にピザ味と記してあつた袋、あれは我が古の祖国では『ピザテブ』という世にも奇怪な太り病を誘発する魔の食べ物なのです。勿論、爺めの忠告通り2袋までしか食べなかつた良い子であれば問題はない量なのですが」

「……良い子はだいじょぶ?」

「ええ。良い子は大丈夫です。なにしろ2袋とこつのは爺めがお嬢様の基礎新陳代謝から華麗に計算して弾きだしたお嬢様のお嬢様によるお嬢様のための数値ですから。用法用量を守つて正しくお使いくださいといふことです」

俺は大げさに両手を斜め上に広げるよつて、自分の論が正しいことをアピールする。

イメージとしてはカラテキッドのあのポーズの手首を曲げないバージョンに近い。

更に駄目押しどばかりにビックと人差し指をあげて追撃をする。

「しかし…………良い子でなかつた場合はー。」

「ば、ばあいは?」

「ハート様になつてしまつのですー。」

「…………ハート様?」

「わたくしめの記憶をご覧いただければわかるでしょう。あの存在感、いればかりは爺やをもつてしても葉で語つべへせる血肉はありません」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「うえええええええん、ハート様いやああああああ

「坊主、見ない顔だな。なんだその貧相な身体は。魔法使いか？にしてはローブも着てないじゃないか」

「いやー、アハハ、色々あります。それはもう色々

「まあ細かいことはいいやな。ダンジョンエクスピーへようこそ。歓迎するぜ」

「ありがとうございます。頑張ります」

いやー、まさかケンシ ウを予想外に気に入った幼女神様が、格闘家のクラスを与えてくださって、更には鍛え上げるためにダンジョンまで送つてくれるとか、なんという急展開。

以下はその時の状況のダイジェスト

「ハート様も悪くないですよ？ あのたつぱりの贅肉でなんと衝撃無効のスキルもつきますし」

にへりつと笑いながら言葉の追撃をする。

単純に太ることを悪く思へぬのではなく、あえて捻つて良くなうこと
で攻撃力を倍増する。

この妙味。元来の性格の悪さを「ア」として、その本能から進る予測
不能な攻撃を仕掛けたまに無想技。

並みの者には真似できません。

「ハート様絶対ヤツ！」

そして話はケンシ ウのかつこよわくと移り、

「かの者の技と同じレベルの技を再現するにはせめてスペシャルラ
ンク程の格闘家のクラスを持つていないと無理ではないかと思われ
ます。」

「えい！」

「あがががが、またですかががが、シビシビれないよつには、出
来なななな

「できる～けどまんない～」

んで、ダンジョンへ送つてもらつたときは

「実はうちの村の周りの低レベルの魔物の出る土地は全て村長一派の管理下にあります。無断で狩りにいくと処罰されます。それ以外の魔物の出る場所は強すぎて自殺しにいくようなものです。よつて強くなろうとしても手段が無いのです。……」

「大変なの？」

「まさしく四面楚歌です。いや、どちらかというと八方塞がりの方が爺めの状況を言い表すにはあつていいのかと」

「じゃあ狩りにいくのにお姉ちゃんがいつも居るダンジョンを使えばいいよ。今送つてあげる~」

んで用意も出来ず飛ばされて、ダイジヨストリームまで。

飛ばされてはみたものの、これどうやって帰ればいいんだ？

無一文だしヤバいよね？ 僕……

とりあえず今居るのは、帰還用の魔法陣型ポータルの前。

おわりくダンジョンへ外から来る人間やダンジョンから帰つてくる人間用の目標地点として設置されているものだ。

そして目の前には小規模の街とも言える程の建物の群れが広がつて

いる。

その周りには城壁というには大げさだが、柵というには立派過ぎる
日干し煉瓦製と思われる囲いが見える。

「おお、これってあのダンジョンゲームにちょびっと似てないか。
もしかしてボッタクリな商店とかあつたりして」

とりあえず帰還に關してはじたばたしてもはじまらないし、幼女神
様が呼び戻しをしてくれるのを期待しておこひ。なんにせよ今は金
策の情報集めに街の散策といきましょか。

んじや、まずは手始めにあの見るからに道具屋ですつて感じの看板
を出しているお店を覗いたりしてきちゃおつか～

ふむふむ、なるほど。「セーラ道具店」かあ。

いかにも美人で綺麗なお姉さまが店主つてな雰囲気の名前ですね。
賞味期限切れの可能性もありますが。

それならまだしも筋肉ムキムキで髭もじやのオッサンが店主だった
ら俺は泣ける自信がある！

どれ、店内をちらりと覗いてみましょ。チラッとね。

おおおつ。

上品な感じにまとめられた店内のカウンターに座るは、

プラチナブロンドの髪に美しく優しそうな眼差し。少し落し気味の眼鏡が知的さをかもし出し、胸は少なくとも平均以上はあるように見える、エルフにすら負けないほどの美人なお姉さんではないですか

これは反則だろーーと叫びたい。良い意味で。

つて、こつち見た！

うわっ、微笑んだ……

…………女神様だ……本当の女神様がこんなところに降臨していたとは。

今俺の顔は傍から見れば茹鶴のように真っ赤に染まっていることだろう。

決めたつ！俺はこの道具店に毎日通つことにするぜー

我ながら男は単純だなと思った瞬間であった。

ええっと、美人のお姉さんの道具屋に毎日通つことに決めたはいいが……先立つものがないわけで。

親指と人差し指でわつかを作つて、『コレでんがな、コレ』とか言う、あの真ん丸いのが足りん。

お金が無くて店に入つたら、まんま冷やかしからね！

まあそれでもお姉様の軽蔑の眼差しがゾクゾクするといつ変わった性癖の持ち主でもあればかまわないのだろうが。

ちなみにこうやって円形にすることから、日本でお金の単位は円となつた。らしい。まったく役立たずの豆知識だわ。

後ろ髪を引かれる思いで麗しの道具屋の近くを立ち去る俺。

まずは親切そうな人から情報収集つてことで、わっさのおこちゃんのところまで戻る。

「あの～、すいません～」

「お。なんだ、さっさきの坊主か」

「えっと、正直にいって今一文無しなんですが、小金でいいんで稼げる場所教えてもらえないませんか？」

「はあ？ 僕も貧乏だから金はあげられないぞー。」

「たかりじゃ ないですって」

「じゃあ強盗か？ 僕の持ち物で高級品はこの縄のパンツだけだ。これだけは死んでも渡さんぞお」

「そんなのいらないですって……もつこいです……」

「はつはつは。冗談はこのぐらいで。ホラ、あそこに白い石造りの建物が見えるだろう。あれがダンジョンの入り口だ。あそこの一階でスライムでも狩つてから核をギルドで売れば小遣い程度にはなるぞ。一階のスライムなら一般人でも負けないだろうが多数を相手にはするなよ」

「…………じゃあいってきます。あんがどー。」

「おひ、ひお 頑張れよ」

「おお、ここがダンジョン入り口。みたいだ。」

「門番つぽい人がいるな。止められたりしないだらうか。」

ドキドキしつつもダンジョン内部へと足を進める。幸いながら何も

言われたりはしなかつた。

入つてみると結構薄暗い。所々に光ゴケがあるのだが、それが均一じゃあないつていうのか見えやすい場所と見えにくい場所とがある。

これだとゲームとかとは違つて魔物に見えにくい死角から攻撃される危険率が高いんじゃないかと心配する。

だが、さらこ少し進むと明かりが設置されている大きな広間に出了。そこには既に何組かの先客がいて、おのおのが斧や剣などでスライムを叩いている。

想像ではもつと戦いつぽいものかと思つてたが、なにやら傍田で見ると想像以上にスライム虐めっぽくて、なつかつ流れ作業のように機械的に行つているからシユールな感じだ。

やつてるのも冒険者といつよりかは、俺よりも年齢の低い子供たちばかりである。

手の空いている子供たちからのにぶかしげな視線をスルーして更に奥へと向かう。

この広間は狩りには適している場所ではあるが、流石にこの中で子供らと一緒に混ざつてやるには少し躊躇つたからだ。

年齢的にきついものもあるが、こういう所にも俺の村のような縄張りじみた、仲間内でしか威張れない害悪にしかならない人間たちの汚い専横が生まれているはず。

つまらないちょっかいをかけられて、つまらない人間と縁が出来るのも避けたい。

大体、ゴキブリホイホイの中で多くのゴキブリと混じって小さな利益に右往左往するような感じの生き方なんてのは俺の性分じゃあないからな。

人をゴキブリ扱いするなんてとか言われそうだが、日本や俺の村でもそうとしか言いようの無い人間ばかりが幅を利かせているのは事実だ。

広間を後にするとまた視界の悪い通路が広がっている。

まだ俺のMP量などを把握していないからあまり魔術は使いたくないのだが、一応視界確保はしておきたいので、候補となる魔術

小さな電球のような光を生み出す、魔術としては初歩の初歩である
ライト と

光の情報を増大して視界を確保する、魔物から目立たないで行動で
きる サーモアイ

の2つから選ぶことにする。

このうち個人行動であれば サーモアイ が適しているようだが、使ったことが無い上に消費MPも把握していない。第一レベルも低いので俺のMPも元から低いはず。

なら消去法で、当然使うのはこれしかない。

「大いなる神の光は我が道をも照らす。 ライト 」

以前魔術を勉強したての頃に使った ライト の呪文とは格段に光量と持続時間の違うその効果に目を見張る。

魔法使いのクラスを持つているかいないかではここまで差があるのか。

幼女神様、さまたまである。

照らし出された通路の奥には、丁度階段状の窪んだ部分に何匹か一緒にまとまっているスライムの上部が見える。

もしあの部分に灯り無しで足を踏み入れていたら、死ぬまではいかないにしてもそれなりのめにはあつていただろう。

さて、初対戦といきますか。

きつい。ちょっと考えればわかると思うが、スライム相手に刃物を使わずに素手で格闘とかなんて無理ゲー。

こいつら動いているときは、髭剃り用ジエルみたいな柔らかい雰囲気がするのに、攻撃あてた感触はまるで自動車のゴムタイヤだ。

敵の背が低いので主に蹴りで攻撃するのだが、レベルの低い俺では攻撃が通りにくい。

魔法でやればいいのだが、MP温存を意識して最初は格闘で挑んでみた。

で、何故効率の悪い格闘での攻撃を続けているのかというと
気持ちいいのだ、身体がスムーズに動くとか、でかい打撃
音とかが。

「格闘家のクラスすっげえ」

蹴りを一度放つごとに、身体が新しい動きを見せてくれる。

軽く力を入れる度に、身体のあちこちの筋肉が喜びで悲鳴をあげる。

動作の一瞬一瞬に、最も適した姿勢と力の入れ具合が自然と理解で

きてしまい、その通りに身体を動かすと、まるで体中で筋肉の喜びが乱反射しているような感覚に浸れる。

最初はただ足裏で蹴るだけだったのが、段々と踵や足刀、つま先などでの攻撃が巧みに入り乱れ、決定打は得られないものの、何度も手数、いや足数を稼いでいるうちに慣れさせいか蹴りの威力が徐々にあがつてきている気がする。

そして攻撃をしている中でわずかに手ごたえが違う部分があるのを見切り、その部分を集中的に蹴ることにする。

「つおおおおおお、パクリ拳つ、東斗百裂脚」

脚が百本もあるようにすら見えると思いたい速度で足技を連続で繰り出す。

踵で大きく抉り、足刀でかき分け、つま先で深く抉る。何度もそのコンボを繰り出しているうちにスライムの弾力に負けずに周りの邪魔な部分が押しのけられて、核が浮き出てくる。

最後につま先で大きく抉り、核の下にまで達した右足の親指をデロピンのような感じで跳ね上げて核を弾き出し、すかさずキャッチする。

「ふう……いっちょあがりつと

ちよつと大きめのビー玉みたいな核を確認するよつて眺め回し、

そして一息ついた後に俺はようやく後ろが騒がしいことに気付く。

「すんげー、なんだよあの技」

「スライムを蹴りで倒してる……」

「田裂脚だつてよ。かつけー」

「でも俺らと効率変わらないな」

「だね」

……かつ、悲しい……

あの広場から近い場所で、少々？五月蠅くし過ぎたようだ。

短慮だつた自分の行動を少し反省して、先を急ぐことにする。

幸いまわりのスライムは鈍足なので、踏み抜いたりしなければ通行の邪魔はされない。

不自然にならない程度の速度でがきんちよらから逃げるように奥へと移動する。

男ってこうこう時はバレバレであつても格好を取り繕おうとするもんだよね。どうでもいいことだけ。

移動中も適当に1匹で倒すスライムを見繕いながら戦い、1階の端っこ、階段のある小さな部屋にたどり着く頃には、核の数は大体30個程になった。

「で、なんでふたつ階段があるんだ？」

ひとつは緩やかな階段。

もうひとつは底が見えないほど深い階段。

多分だがこの深い階段は熟練者用の階層のショートカットではないかとあたりをつける。

俺が選択するとすれば緩やかな階段の方なのだろうが、そもそもいく必要があるのかということも考えるべきなのだが。

以前に聞いたことがある話からすると、今の所持核は大体1個が100ルートぐらいだと考えて300ルート程度である。

これだと数回食事をするのは余裕だが、宿代にはかなり辛い。

このままここでスライム虐めを繰り返すのもありだが、目標として余裕の出来る金額、1万ルート以上を目指すとすると、倒すのも探すのも時間がかかるスライムだと難しい。

「つむ、行こう。」

俺はいそいそと下へと続く階段に脚を踏み入れた。

モソモソ、モソモソ。

今俺の目の前でモソモソとしているコイツ。

こいつは確かラージバーー。俺の村周辺でも見かける雑魚魔物の一種である。

しかし雑魚とは言つても、ウサギというには大きすぎる体躯を使った強烈な体当たりは子供であれば動けなくなるほどの大ダメージになるだろうし、そのまま倒れないと大きな歯で食いつかれるというあまりよろしくない攻撃をしてくる多少厄介な魔物である。

1階でスライム虐めをしていたガキンちゃんには少しきつそうな相手。

1匹であればなんとかなるんだろうが、一見安全無害そなこいつらはゲームでいうリンクモンスター。

必ず5匹程度の集団で行動をし、わずかでも攻撃の意思を見せた者には集団で攻撃をしてくる、リンクモンスターどころかリンクチモンスターだろーと思わず突っ込みたくなる習性を持つていて。

なのでただ眺めていいだけなら比較的安全なのが、いざ手を出すとなると勇気が必要であつたりする魔物なのである。

俺も例に漏れず、さてどりしそうかと攻撃を躊躇していたのだが、既にスライムでウォーミングアップされた足技で、まず2匹を田安に即効で蹴り抜いて、後はなんとかやりぬくという即興の作戦をたてて足を踏み出した。

「飛連脚！」

本当は技名など叫ぶ必要はないのだが、今回は景気付けて。

もつとも叫んだのも既に飛び込んで2匹を足蹴にしたその瞬間を見切つてだ。

流石に、当てる前に叫んで、見事に避けられるお約束は自重した。

それでも攻撃前に叫ぶことによって相手が一瞬ビクッと行動不能になる効果も期待できるから、タイミングさえ見誤らなければ攻撃前に叫ぶのも悪くはないかもしれない。

ちなみに今回の飛連脚、一匹は右足つま先での飛び蹴り。もう一匹は左足踵での打ち下ろしに近い蹴りを同時に打つ、両方を組み合わせた技である。

日本人だった頃や、格闘家のクラスを得る前の俺ならば絶対に無理に近いような技だが、やはり今の俺ならば楽に出来るようで、空中での両足の軌道も体重移動も、そして着地もまるでカンフー映画でも見ているかのように華麗に決まった。

「おひと」

着地と同時に他の3匹のラージバニーが足をめがけて突撃してくるのを、すかさず上空におおげさに飛んでかわす。

そうすると向かつてきたラージバニーへと下に蹴りを入れるだけで倒せる理想的な状態になつていて、「に」に気付き、そのまま体重をかけた蹴りで2匹を素早く踏み抜く。

更にもう一度飛んで最後の一匹をサッカーボールキックで蹴り倒す。1階のスライムとは違い、ラージバニーの方は体重をかけた蹴りで簡単に一撃でケリをつけられた。

「いじつは面白いな。相性がいいってヤツかね」

倒れたラージバニーらの核をつま先蹴りでもぎ取りながら、そうじちる。

「なんか楽しいわ、これ」

飛んでは蹴つて、飛んでは蹴つてを繰り返す。

あれからひたすらジャンプアンドキックだけでラージバニーを倒しました。

核の数は既に一五を超えるだろ？

ポケットに入りきらないので上着を脱いで風呂敷のよつて包んでい
るが、少しみつともない感じがする。

「こつたん帰るとするか。換金や宿の手配に時間がかかると野宿に
なるからな」

目の前に広がる15匹ほどのラージバニーの遺体を眺めながら、そ
う呟いて1階の階段へと足を繰り出した。

俺は今冒険者ギルドの田の前に居る。

ギルドの外観は それっぽくないといつか、酒場みたいになつていて入つたら全員に睨まれるような感じかと思つたら、普通の商館みたいだつた。

改めて思えば、さつきの子供たちでも利用している場所なのだから、そこまで無法なわけもないかと納得しつつ、少し緊張しながら扉を開けて中に入る。

入り口近くの受付のような場所に居た、年配の柔らかい感じのおばさんに声をかけてみた。

「えーっとすこません、魔物の核の買取つてどいじょうか？」

「それでしたらいじの突き当たりの部屋の中やつてしますよ。 いじのギルドカードはお持ちですか？」

「いえ、持つていないです」

「なら作つてからの方がいいですよ。 買い取り額が少量ですがアッ プしますので。 簡単ですから手続きを済ませてしまいましょうか」

「じゃあお願ひします」

手元の魔道具らしきものをひょこひょこと操作する職員さん。随分手馴れた様子である。

「では、ここに指を入れて5秒ほどお待ちください」

言われたとおりに、ツイ魔道具に指を入れる。少々不安な感じもしたが特に何も無く5秒が過ぎた。

「もういいですよ。これで登録は終了です」

「なんか簡単ですね」

「ひとつと笑う職員さん。若い頃は美人だつたろうなーと思わせる微笑に和んだ気分にさせられる。

「これが身分の証明用のカードで、注意事項などはこの小冊子に全て書いてあります。冊子は貸し出なので後日読み終わったらはやめに返してくださいね」

「あ、はい」

思つたよりもはやくスムーズに登録が完了した。

とはいへ、宿の手配もしなければいけない俺はゆっくりもしていられない。

貰い取り用の部屋「しごと」に足早に歩き、無心でドアをあける。

部屋の中には3つほど窓口があり、人がいるのはその「つかのひとつ」、40ぐらこのおじさんの窓口だけだ。

「あのー、魔物の核の買取お願ひします~」

「ほこよ、じゃあこの容器に入れてくれ」

俺は風呂敷もどきの上着のきつてしまっていた結び田をこわいそと解いて、貰った指定の容器の中にはりと広げた。

「お、結構取つてきたね。この大きさだと殆ど「ラージバー」か。大きくなつたら?」

「ははは、まあそこまでは。一応クラス持ちなんで」

「ほお、クラスつて戦闘系か」

「やつややつですよ、村人のクラスは普通はクラス持ちとは言いませんから」

「ははは、確かにそうだ」

おじさんは言葉を交わしながらも手は休めない。

おお、職人だ。いや、職員か。

受付の婦人もそうだがこここの職員さんは対応がはやくて、あたりも柔らかいし感じがいいな。

俺の村の奴らとはえらい違うな」と和みつつ まあ人は皆、利害関係のしがらみで生きてるからほんのちょっと歯車が掛け違えばこの先どうなるかは分からないな。

人は素晴らしい、そして怖い。

そんなことを考えていると精算終了の声をかけられる。

「スライム核が1個100ルートの32個、ラージバニー核が1個200ルートの237個で合計が50600ルートだ。どうする？ カードに貯めておくか？」

「2万と端数だけ現金で貰えますか。 後はカードで

「おうよ。 少し待つてな」

おじさんは出したカードを受け取りつつ、力チャ力チャと魔道具を操作している。

大して待たされずにカードと現金が差し出される。

「ほら。 またこいよ」

「どうも～」

そして軽く手を振りながら部屋を後にした。

さて、後は宿の手配か。

ギルドの受付の婦人に相談をして紹介された宿に来てみた。

なんでも妹さん夫婦がやつてている宿屋らしい。

パステルピンク色をふんだんに使用したちょっと少女趣味な外観には引いたがさつそく中へと入る。

前にいる女性が妹さんだろうか。

ちょっとだけ顔立ちが似ている気がする。

「こんなにちわ。泊まりたいんですけど部屋空いてますか?」

「いらっしゃい。シングルだつたらまだ空いてるわよ。一泊400ルートで朝夕食事がついて5000ルートになるわ」

「ああ、よかつた。実はギルドの受付の女性に紹介されてきたんですけど」

「あら、姉さんの紹介? なら一泊3500ルートでいいわよ。食事はまけられないから付けると4500ルートね」

「予定がまだわからないんですが、とりあえず一泊食事つきでお願

「しまーー！」

「まあ、元気がいいわね。分かったわ。食事は部屋まで届けるけど、居ない時には下げてしまつから注意してね。声をかけてくれれば少し遅れても食べられるけど、あまり遅くなつてから言われてもたいした物は出せないから勘弁してね」

「はーー」

よかつた。これで一応は当面の危機的状況は乗り切った。

しつかし考えてみると、幼女神様ひどいよ。

いきなりダンジョン近くに飛ばしてくれやつて、どうやつて帰ればいいのやつ。

ここからあの村まで帰るのには乗り物を乗り継いで帰れるのか……
疑問すぎる。

「おまたせ。これがおつりね。それとリップの間の鍵を渡しておくれ
ね。部屋は階段を上がってすぐのところよ」

「わかりましたー」

ちなみにリップというのはこちらで人気の高いフルーツの一種だ。それが部屋の斜前に使われているのだ。うん、嫌な予感がする。

疑心暗鬼にとらわれつつも、俺はあてがわれた部屋へと足を運んだ。

「ううう、これは」

窓枠がピンク色だし。

クッションがハート型だし。

小物がいちいち可愛いし。

これ女性用の部屋じゃないか？

清潔感は高いんだけどね！

部屋を間違えたというわけではないんだ。多分全部がこんな感じの部屋なんだろうな。

何故何故、ダンジョン探索で魔物を殺しまくつて帰つてくる宿がこんなにファンシーなんだ。

雰囲気の格差が激しそぎで、頭の中がハーレーシヨンを起しそうである。

まあ今までちょいと自分で整理がつきにくかっただけで、これでも適応性は高い方だと思ってるから、ちょっと苦笑して見てみたかっただけだけどね。

「さて、食事までは時間があるし、かとこって横になるにも寝てし

まつと食事の時に起きたのが心配。なにで時間潰すの?……?」

ボスッとクッシュョンに腰を落としてもたれかかつつ、そんなことを呟く。

(アリーベーにてお湯とかのサービスあるのかな。少しダンジョンで汗をかいたから綺麗にしてみたいけど)

思い立つたが昨日。

わくわくおかみさんのところに聞きて行へ。

「まあ。私としたことが言い忘れていたわね。なんといふのはシャワーがあるので。男女用に2部屋あるからいつでも入っていいわよ。でも女性用に入つたら怖い目にあうから注意してね、うふふ」

怖い怖い、おかみさん、眼が怖すぎるよ。

シャワー室もまたファンシーな雰囲気のものだつたが、清潔な感じは素晴らしいが、設備的にこいつらのことが揃つてること事体が珍しく、俺にとってはここに泊まれたのは非常にラッキーであると言えるだろう。

夕食も幼女神様の恵みの食料品よりは一段ランクが低いが、それでも村で食べていたものとは雲泥の差で凄く美味しかった。これが毎日でもいいくらいだ。

色々とあつた一日だつたんで、食事の後はすぐにベッドで横になり睡魔に襲われて抵抗も出来ずに眠りについたわけだが。

で、目を覚ましたら何故か今、俺は子猫を抱いている。

女性を言つあらわした 子猫ちゃん のほうではなく、

本当の毛むくじやの いや、ふわふわで無駄にありえないほど可愛い感じの子猫様である。

「どうからきたんだい。この子猫をまは

鼻の頭をつると触れるよつて軽く押してやつながら、返事など来るわけも無い問いをぶつかる。

「み～、み～～」

「うひこののを鈴を転がすよつな声と皿ひのだらつか。

「よしそー、おー、可憐になー。うの飼い猫かな？」

「お兄ちや～ん。お腹減つた！」

「う……あ……？」

「う」飯、「う」飯～

「子猫が喋つた！ じゃなくて幼女神様が子猫ー。」

「お腹減つたの～」

「うへ、何言つてゐんですか。昨日はあれからじんだけ酷い田じあつたことやら」

「お兄ちやん、酷い田じあつたの？」

「う……こや、よく考へるとそれほど酷くもなこ僕もしないこでも無いかもしない様な」

「じゃあ、うへは～ん～、食べこじつよ～

「仕方ないですね。でもその姿はどうがいいのか」

「人の姿の方がいいの〜？」

「……幼女神様の人間バージョンは可愛すぎますからね。この街にいる時は変な人たちに目を付けられないように猫のままの方がよい気がします」

「みや〜ん」

「それと念話は出来ますか？　自分は出来ませんが幼女神様の力でなんとかなるのかな」

『これでどう〜？　聞こえてる、お兄ちやん〜？』

『ぱつぱつです、聞こえてますよ。そちらもどうですか？』

『「じつもぱつちりだよ。早く早く〜。」飯食べに行ひよ〜』

『この宿は朝食もついているんですよ。運んできてくれるはずですからそれを食べてからにしましょ。昨日も食べましたが結構美味しかったですよ』

『わかつた〜、はやく来ないかな〜』

『あ。でも幼女神様が猫の姿でも一緒に居るのはまずいかな。動物とかは食事を扱うところでは嫌われるから』

『わたし猫じやないもん〜』

『わかつてますけどね。とりあえず飼つている猫がついて来ちゃつたと言う理由で宿のおかみさんとのじに断つてきましょう』

卷之三

幼女神様子猫バージョンを懐に抱えて、おかみさんの所に顔を出す。

「あの~、この

「…………えつと」

「なつ、なつ、」JRの十一。
船の猫なの？
「やへん。なんて可愛い
子猫のおおあわ

『ちゅう、おかねでトシコハ嘗めれ。』

《くねくねしてゐる》

子猫様の件はしづかせむやの「ひびき」、適当に宿に泊めても問題ないひみつに話が運んだ。

食費も追加は無しだという。むしろ人間様より豪華かもしれないものまで出してもらつて、なおかつおかみさんがこちらにお金を払おうとするかのような勢いだ。

子猫様のラックの数値ハンパねえー。

これが間近で感じるヒホラルキーの味かと俺の纖細なハートが少し傷ついたものだ。

それはともかく今日の予定だが。

昨日に引き続きダンジョンにいくのは決定として、その前に

魔物の核を入れる袋を道具屋で買う必要がある。これは重要だ。

それと怪我をしたとき用の回復ポーションを道具屋で買う必要もある。これも重要だ。

それに道具屋のおねーさんの名前を聞く必要もある。これが一番重要だ。

なんとー全部必須の事項は道具屋関係ではないか。

偶然だなー。いやはやなんとも。

とこつわけで、子猫様を肩にのひけてレッシゴーーー。

《「」も「」ねー》

やつてきました、セーラ道具店。

昨日は文無しで躊躇して入れなかつた店内へと、ドアチャイムを力
ワンコロソと軽快に慣らして身を入れる。

「あー、昨日の子ね。こりしあー。可愛い猫ひやんを連れて今日
は何の用かしらー。」

（おおお、なんといつじだ。声まで魂を奪われるほど綺麗なんだ。
しかも近くで見るとますます美しい。しかも俺を覚えてくれていた
とひづれ……や、緊張するなあ……）

「えと、今日は、魔物の核を入れる袋を買ひに来ました」

「核用の袋ね。安いものが500ルートで少し高い丈夫なものが25
00ルートよ。お勧めは長く使つつもりなら高い方ね」

「じゃあ、えっと、高い方お願ひします」

「みー、みー」

「うふふ、わかつたわ。他には何か欲しいものはないの?」

(ああ、微笑がなんて魅力的な
……恋に堕ちてしまいそうだ)
もつ俺は黙田かもしけな

「んと……回復ポーションを、お、お願ひします……」

「初心者用のでよこのよな? 1個1000ルートだけれど二つつ必要かしい」

「3つ……いえ、5つ……で」

「今のところ全部で7500ルートになるわ。これで全部でいいのかな?」

「は……」

(オイオイ! 名前を聞くんじゃなかつたか、俺つて馬鹿ばかああ、
へたれめえええええ)

おずおずと手持ちのルートを差し出す俺。

「はー、じゃあこれ。ポーションは袋の中に入れておいたから割り
なこように注意するのよ~」

「はい、あ、ありがとうございます。」

最後にお釣りを貰つて

「ふふ、またきてね」と言われたと同時に手を握り、手を包み込まれる様に握られる。

その瞬間、俺の全身の血が逆流する。

(や、柔らかくてあつた感じでおおおおおおお)

しかし逆にこのことが幸いして俺は冷静になつた、いや、ようやく本来の自分を取り戻せたというべきか。

血塊の灰色の脳細胞がフル回転して警告を鳴らす。

俺の今までの不幸から考えてこんなウママイことがおきるわけがない。

そうだ
これは何かの罠かもしれない。

あの村の監が仕組んで俺を騙そうとしてるんだつー。

そうか、そうだつたんだ！

冷静にイイイ！

簡単なつ！

事だつ！

こんなにもつ、優しくて！魅力的で！美しい人が！

女性のわけがないじゃないか！

ということは、この人は

男

男

男

男

あれがついている
男

ג' עג' ג

「？」

「エーテルの君ー！」

俺は道具屋を飛び出して走り出した。

子猫様と袋を抱え、ただひたすらに。

頑張りました。

俺は頑張ったんだ。

本当に無駄な方向に

何が冷静だ！

酒に酔つて真っ赤っかな顔をしながら「よつれない」、おれはよつ
れまーせーん♪ とか言つ醉つ払いと同じじゃないか

えーっと、あれです、あれ、結局は単に恥ずかしくて混乱して暴走
したわけですよ。うん。

そう、俺も男だから、綺麗なお姉さんは大好きですよ？

でも流石に顔で惚れたりとか、笑いかけられただけでは惚れません
よ。

惚れた腫れたやうはちよい悪ノリしただけなんですってば。

やっぱ人は中身ですから。

ですからそれほどぞひきの醜態も気にしません。

まつ、細かいことはもう置いておくことにします。

いや、もう許して！

…………問題は次にあの道具屋には行きづらっこことござります。

そんなことをだらだらーっと考えつつ、既にハツ当たり氣味にラージバニーを300匹ほど葬つていたりする。

こいつらもハツ当たりで倒されるとはなんと不憫な…………

「飛燕連脚！」

ふつ。今はもう使ってる技は 飛連脚 ではない。 飛燕連脚 だ。

そつ、技がバージョンアップしたんですね！

もとから我流だから創作したとも言えるけど。

何故 燕 の一文字が付いているかと言つと、かの巖流島の決闘で有名な燕返しをモチーフにしたから。

ここで勘のいい人ならもう解るだろ？。

この技は飛連脚の技を繰り出した後に両脚を鉄のように交差せせて、その勢いで再度蹴りを繰り出すのだ。

ただし体重移動がおそらく難しくて、昨日は技のイメージはあったのだが出来なかつた。

鑑定してみないとわからないが、狩りまくつてレベルもあがつていいのが今日出来るようになつた原因であろうかと予想。

もうね、バニーなんて瞬殺すぎて。

倒すより核を集める方が時間と手間がかかつてしんどい状態。

んで、幼女神様は只今俺の腕の中で子猫状態でおねんね中。

朝食を食べた後から口数が減つてたと思つたら、ずっと眠たがつてたらしい。

まあ女神様といえど子供であるからして、やるいじとこえは食つ寝る遊ぶの三つで要約は足つりだ。

しかし激しく動かさないよう注意してはいるとしても、よくもまあこれほどの戦闘状態で眠れるもんだね。

お昼時だから幼女神様が眼が覚めていたら何か食べに行こうと思つてたんだけど、これはもう狩りを続けてもいいかもしない。

JJの次のランクの敵の情報ももう手に入れているし。

ギルドで借りてる冊子の初心者用のダンジョン解説によると、この次の階のパープルウルフは一応ウルフの名前はついているが、実際にはその最底辺の亜種。

大型犬程度の強さといふことだ。

性質は元の世界でのハイエナのイメージで、気性が荒いといつよりはとにかく色々汚い。個別行動を好むのだが孤高じやなくて協調性がないだけ。繩張り争いで喧嘩が絶えなかつたり、他の個体の食料を奪いあつたり、強い敵にあうと素早く逃げて、P.T.などでいくと必ず後衛をターゲットにする、細かいことはやつてみないとわからぬがそんな感じらしい。

……これは俺の大嫌いな性格をしている敵だな。

同属嫌悪じやないよ？

ある意味、好機。

まだ少し心の奥でくすぐつてゐ恥ずかしさの憂き晴らしの一

ふつふつふ。徹底的に駆逐してやるじやないか。まつてるよ、ゴミ
ども。

道を少し戻つて先ほど通つたときについたそれらしい岩陰に階段を確認し　　ツカツカと中ほどまで足を進めると、もう既に三階の地面が階段下に覗き見え、更に　ライト　の魔法の光で気付いたのかこちらを不機嫌そうな顔で睨んでいるくすんだ紫色の犬みたい

な魔物も見えた。

（今度の標的はアレか。なるほどそれっぽい顔つきをしている）

階段を飛び抜かすような勢いで一直線に駆け下りた俺は、その勢いのままにパープルウルフに飛び蹴りを食らわした。

「どうせやりにいくなあ……まあ、ラージバーに比べると、だ
がつ！」

パープルウルフはラージバーに比べ、見かける数は少し多い程度
で、

倒すのにも相手が逃げなければ一撃。

走り回って速度をつけて、標的を見つけたらすかさず逃げる前に蹴
りを入れて倒す。

核はバーよりははずしやすい部分にあるので楽。

と、ただそれだけなのだが。

「ここから逃げ足速すぎだらつ……

普通はまあこの手の動物に人間が走る速度でかなうわけがないんだ
から仕方ないけど、

今の俺だとそれなりに併走できるほどスピードが出せる。

でもそれでもトドメをさせるのは2匹に1匹ほど。

倒せた方の敵はいいとしても、倒せなかつた敵のほうの時間をかけて追い回してそれでも逃げられた時の虚無感はなんともいいがたいね。

これだと綺麗に倒せるラージバニーに比べると、ウルフ相手は歯がゆくてスッキリしないなーなどと言わざるをえない。

それと特に気分悪いのは、このまとわりつく視線

通路の影とか、ライトの光が届かないギリギリの領域とかで、こちらを観察するような視線をいくつも感じる。

こいつら行動は単独なのに、獲物を取り合つ汚さがあるから、擬似的に集団行動の利点も得られるんだよな。

この、犬っぽいのに群れで追い詰められるって感覚は 暗闇に犬の眼がいくつも光つて見える状態つてのは、前世の日本人の祖先の記憶なのか本能的にいやーな感じが付きまとう。

バニーはノンアクティブだから群れを倒したら一息つけたが、バルウルフはアクティブで狩場で休みにくいのも気に食わない。

「はあ～。やっぱ、ラージバニー狩りに戻らうかね」

軽く地面を蹴つて小石がコロコロと転がる様を見て、そう呟く。

(ん……)

インスピレーションに導かれるままにその小石を拾い、手の中で弄ぶ。

子供のたわいない遊戯のように、曲げた人差し指に小石を挟んで親指で弾いたその飛礫は　　遊戯とはとてもいえない速度で土壁へとめり込んだ。

「…………指弾か、コレにけるかな？」

ビシッ！と弾き出された小石がパー・ブル・ウルフの尻に突き刺さる。

「キヤン」と鳴きくずれる奴らを尻目に動きが取れにくくなつたとこを蹴りでトドメを指す。

あれから150匹程のパー・ブル・ウルフを狩つた。

狩り効率としては指弾を使い出してからはもうラージバーに並ぶ程度にはなつているはずだ。

小手先の技術を使わずに、全部勢いにまかせての蹴りでカタをつけられればもつとスッキリするだろうとも思えるが、この低威力中距離攻撃と言おうか、指弾という攻撃手段に慣れる練習だと思えばそれも気にならない。

やつじこねじとせやれほじ高度な技でもない。

しかし格闘家のクラスを得てから小さな動きひとつがそれを重ねる度に洗練されていく。

才能が　ただの単調な狩りを高密度の訓練へと変容するのだ。

なんの変哲も無い石のを指で弾くと、この動作を繰り返すだけで、どんどんと命中率と威力を上げる弾丸と呼べるものに変わっていく。

しかしあれだ、いつのまにかいつの後ろから指弾を叩き込むとですな

ヒヤビキカムを握りこめのまじ愛嬌だ。

ふふふ。

いえ、狙つてませんよ？

すべて偶然ですつてば。

クキッ、クキッ」と。

「いやー、見事に穴が開いちやつたな。あれだけ酷使すりや当然なんだけどさ」

革靴のつま先の穴から見事にのぞいた足の親指を、曲げたり伸ばしたりを繰り返しながら眺める。

なーんかつま先が敏感になつてきたな、格闘家つて感覚も鋭敏になるのか〜つと思つてたらコレだよ！

幼女神様がお起きになられたのと、俺の愛用の靴が壊れてしまったのが同時に発生してしまったので、まだオヤツ時前ぐらいだが適当に狩りを中断して街へと繰り出すことにする。

例の「ごとく、幼女様が「ご飯〜」とか「お腹減つた〜」とか五月蠅いからだ。

で、帰路にあの1階の広間を通りたときに、何やら子供たちが揉めている場面に遭遇した。

感じからすると新しいで狩りをする子供と、今まで狩ついた子供の繩張り争いのようだ。

（まつたく…… じんな小さなうちから随分と醜いもんだ。スライムぐらいで仲良く肩並べて狩れよ、ウツギH H H———）

と内心で毒を吐きつつ、

やつぱりあそいで狩らなかつたのは正解だつたなと思いながら足早に立ち去つた。

『さてと、幼女神様。ガツツリ食べるものとデザート的な甘いもの。どっちが食べたいですか?』

『うーんとね、両方!』

『………… ですね———やつぱり』

『うん!』

『どいかのお店に入つてもいいんですが、猫の姿だと食べにくいでしょ? ならば商店街の方にでもいつて美味しいものを物色でもしまじょうか』

『するの~』

道行く人の歩く方向にも流れがあつて。

この時間は見るからに主婦というような買い物籠を持つて出歩く人たちがある一定の方向に多く流れていつていて。

それを連れは当然

『ここがこの街で一番の大通りっぽいですよ?』

『あれ!』

この大通りについてすぐに、気の早い幼女神様がまっさきに欲しがつたのは3、4人ほど人が並んでいるところで売っている焼肉乗せパンである。

『では並んでみましょうか』

俺としては並んで買うようなのはいつになつたら順番になるんだろうとマイナスな方向に考えてしまうのであまり好きではないのだが。なにしろ幼女神様の仰せがあるので、たかだか数人程度なら気にするほどでもないので素直にさつさと並んだ。

いやも、日本に居たときにはスーパーとかでどこかのレジが早く終わるかな~と思って、熱心に並ぶところを選んだ時ほど、何故か一番待たされるとかいう経験が多いのがトラウマになつてゐるわけじゃないよ?

ほんとホント。

ただ並んでいるのも暇なのでつこでに周りの商店も見回してゐる。

あの宿の部屋の名前にもなつてゐる果物のリップや、神殿で最初に食べたリング「もどきのティーア」も売つてゐる。

いくつが買つてこつて、適当に摘むかな

つとやうづれば一応聞いておけ。

『えつと、幼女神様はフルーツはお好きですか?』

『うん!』

『じゃあ、お肉は好きですか?』

『うん!』

『では、おサカナは好きですか?』

『うん!』

『さい、お野菜も好きですか?』

『うん!』

オッケー、幼女神様の嗜好は全て把握した。

既に聞くのも愚問だな！

「何だろ？」

わざわざから妙に視線を感じる。

幼女神様がそれは非常にひじょうに美味しそうに も
ゆもゆと表現しにくい音を立てながら色々なものを俺の手渡しで食
べている姿は、既に周りの主婦や女子らの生暖かい視線を集めまく
つてはいるのだが。

俺が気にしているのはそれとは別。

最初はパープルウルフの時に感じたような嫌なものではないので無
視をしていたのだけだ。

こちらもヤツラと同じく複数の視線なので気にかかつってきたのだ。

この感じは……

敵意のある視線でもなく、殺意の乗った視線でもない。

何かこう、深い悲しみの混じった諦めのような感情がまとわりつい

そう、これはまるで少し前までの俺のような

第18話 視線（後書き）

年越し、そして新年です。
準備に忙しくて更新しにくいです！
ということで今日はこの2話でおしまいです。
ではまた来年に～

「あの〜、夜って出歩いても大丈夫ですか？」

「う〜ん。あなたまさか夜にダンジョンに行く気なの？ 危ないから止めときなさいって」

「うょっと夜に行かなくちゃならない事情が出来てしまつて……」

「……しうがないわね〜、無茶しうや駄目よ？ ほり、裏口の鍵を預けておくわ」

「すいません、無理言つて」

今日も昨日の宿に泊まる」としたのだが、

夜に出歩かなければならぬ用事が出来た為におかみさんへと交渉をした次第である。

とりあえずの了承を貰つたので、準備万端。

夕飯を食べ終わつてから眠れば夜には起きれるだろ？

ちなみに穴が開いた靴は修理屋で革の切れ端を付けて貰つて補修さ

れている。

これでじょりくはもつと思つ。

『やつぱ寒いな』

『どいこくの〜』

『つとちよつとね』

起きたのは一度丑三つ時ぐらい。

まあ簡単に言い直せば午前2〜3時ってところだ。

俺の予想が正しければ今の時間が最盛期のはず。

進む先の道は薄暗い。

ライト を灯してもいいんだが立つのは免だ。

夜なので治安が心配ではあるが、今の俺ならそつ問題は無い。

一人で歩いていれば、数人に襲われればまあ助からないだろうが。

だが大丈夫だ。

何故ならここではダンジョンがあるから。

そもそも今の俺を襲つて倒せる程の身体能力的に強い人間は強盗をするほど金には困らないというわけだ。

夜中の人を探して襲つて小銭稼ぎよりも、ダンジョンでいくつりでもいる魔物を倒す方が効率が良いし。

第一に 人を襲うなら夜中の街よりもダンジョンの中ほど最適な場所は無いのだから。

チエイサー

主に素早く逃げやすい魔物などに小さな魔力を打ち込み、見失った場合などに追尾をする用途の比較的簡単な魔法のひとつである。

それを既に脳のうちにつか見繕つたやつらにかけてある。

(やつぱり集まつてゐるよな)

追跡魔法の反応を確認しながら、深夜の街の中心へと歩を進める。

俺は今から嫌なものを見に行く

そして少なからず嫌なめにもあつだひつ。

内心を反映したように足取りは重く、

それでも歩んだ先は、やはり見知っている建物の前であった。

「はあ――…………、やっぱ……、だよなあ……」

白い石造りの建物。

いわすとしれたダンジョン入り口である。

一応やる気のなさそうな門番も一人いる。

関わりになる気もないで無視して中へと入っていく。

薄暗い通路の突き当たりに見えるは、

昼に見たよりも更に薄暗くなりすぎた1階の入つてすぐの広間。

暗いのは当たり前だ、こんな夜までガンガンに灯してゐるわけがない

からな。

使う人間が居るはずもないのに

わずかに光るのは、昼間についていた魔灯の残りカスの魔力のせい。
そしてその暗さと反比例して、目の前に広がるは昼間よりも多くの
子供たちの影。影。影。

昼にここに居た面々とはまるで違つ

全員が生氣の無い眼をして、何人もがゾンビのよに時折出るスマ
イムへと群がつている。

そう、こいつらは

この街に初めてきて村人Aを演じてくれたおもしろいおっさん。

ギルド受付の丁寧な対応をしてくれる上品な婦人。

買取窓口の気さくな話しやすいおじさん。

少女趣味の宿のおかみさん。

女神様のように微笑む道具屋の綺麗すぎるお姉さん。

そして、昼間にここに居た子供たち。

そんな 陽 に属する眩しく明るい世界に住む人たちに、

居ないことされている 隠の存在

あの村での

小さな女神様と出会い前年の俺なんだ

「この場には本来居ないはずの、ひとつの異分子を見つめるかくの視線。

その見つめられている対象である、

俺は今たぶん、

傍から見ると非常に険しい顔をしてしまっているだろ？

何時から何時までかは知らないが、

おそらくあの昼間の子供、いや餓鬼どもらの居ない時間帯のみにこの利用してゐる弱者の群れ。

「ムカツク……」

苛立つてゐるのは、

昼間にいた餓鬼どもにか。

反抗も出来ないこの子供らにか。

それともなにもしないこの街の人間にか。

それとも、あの村での無力な自分を思い出すからか。

いつのまにか広間に居る子供たちはスライムに群がることを中断して

全員が俺をおびえた眼でみつめていた。

(酷いもんだな……ろくな武器すら持つてる奴もない)

俺は苛立つたその心のままに、たまたま眼が合った小さな子供の前に無造作に歩み出る。

「亜人……」

服の端からのぞくその毛深い四肢はおそらく獣人系の種の証。

俺が遠慮もせずにゅつくりと前に出て、手を伸ばしその身体に触れようとしたその時

「下がつてー」

その子を奪つようひつたくつ、間に入つてかばう一人の姿。

他の娘は少し年上らしいが、まだ子供らしい中性的な顔立ちに凜々として目付きと流れるような眉。

ちつ、イケメンだな。

なるほど、
のまとめ役か。
いるだろう
とは思つてたが、コイツがこの群れ

そのイケメンがギガヒカルを睨んだまま、おもむろに懐から安物そうなボロいナイフを取り出してこちらに向ける。

「ジルっち！――――――！」

「ジルねえ」

「ダメだ！」

(なつー ジルつかだとねねねねね)

傍らの巨乳っぽい少女がイケメンガキにすがりついてようこもよつて ジルっち と叫びやがつた！

ジルつち
だぜ、
ジルつち
！

あまりのインパクトについカツとなつて、その後一瞬何も見えない聞こえない状態になつたぜ。

（俺だつて、俺だつてええーーーつ

女の子から つちとか、 そんな嬉し恥ずかしな呼び方して貰いたいわあっ！）

決めた。こいつは殺す！

イメージの中でビジッと指を立ててやう画眉する。

『えへ、殺すの～？』

『いやいや、ノリで殺しちゃいけませんって。言葉のアヤつてものです』

決めといた筋書き通りに上書きしようか。

軌道修正、軌道修正。シリアスマードに戻ります。

「こつらの…………アタマはお前か？」

「ああ。格闘やうが何の用だ……」

「ふん、ヤツパ知つてたか

だろうな。非力でツマハジキもので社会的な力を持たないガキには

情報だけが命綱だしな

俺は核用の袋に手を突っ込んでひとつを掏み出して、すつと田の前に掲げ そして落とす。

それは口ロ口ロとガキの足元にまで転がつていった。

「なんのつもりだよ……」

「やるよ、拾え」

一瞬、驚いたような表情を見せて足元の核に眼を移したが、すぐに元の警戒した顔つきに戻り、俺を睨むイケメン。

当たり前だ。こんな小さなモノひとつじゃ、皆どじつか自分ひとりも救えやしない。

こんな程度で喜ぶような薄い闇しか背負つてないなら、俺が手を差し伸べる資格も甲斐もない。

陽の光の元に戻った途端、他人事には眼もくれないアイツラ 一の街の大勢の愚物と同じになつたんじゃ、俺が手をかけてやる

価値すらも無いんだ。

俺はまたひとつ、核を取り出し放り投げる。

「お前らで仕事をやろう

今度はふたつを放り投げる。

「お前らの傷を治してやろう

今度はみつつを放り投げる。

「お前らで武器を作りやろう

手掴みで持てるだけの核を放り投げる。

「お前らに戦い方を教えてやろう

「お前らに腹いっぱい食わせてやろう

次々、次々と俺は袋から核を掴み出しては放り投げる。

「だから

「

「俺に

「

「俺につ！」

「この街の全ての情報をよこせっつ

「みー、みーー」

「！」

俺がこの街の全てを手に入れるために。

第20話 暗闇（後書き）

今日も2話更新。

そしてこの後、新しい小説も投稿します。

定番のVRMMOモノ。

こちらとは毛色も書き方も違いますが読んでくれると嬉しいです。

ザ・土下座。

それは日本人の魂。

浮氣をしたときに誤魔化したり、結婚記念日を忘れてたのを謝つたり、お小遣いの前借を頼んだりと、万能包丁のように色々と使える便利な業である。

それ故に いにしえから男親から男の子へと、家伝として脈々と受け継がれる。

そしてその集大成が今ここに。

「幼女神様、どうか俺に治癒師と鍊金術師と鍛冶師と細工師と商人と料理人と教師のクラスをお与えください！」

「えい！」

「ががががガガガガガガガガガガガガガガはっ！」

（ちょっと、これ今まで一番キツイんですけど。一気になんか頼む

んじゃなかつたわ、もう遅いナビ……（

あの後、500個にも及ぶ核が散らばつたさまで呆然とする奴らを尻目に、

「こいつは手付けだ。次が欲しければ俺の泊まってるファンシーな宿屋に連絡をよこせ。仕事をくれてやる！」

と黙つてダンジョン奥へと去つていった。

まあ連絡は来るだらうな、例え俺のあの態度に好感を抱いてないとしても。

なにしろ昔の俺自身と同じ立場なんだから、俺がそれを一番良く知つてゐる。

昨日は、いや今日の朝になる前の夜だったが、やつらを見たときの苛立ちのままに芝刷染みた行動をとつてしまつたが、結果的には良い流れになつたと思つてゐる。

あの場は強気な態度で接した方がよかつた。

俺の中の苛立ちを、やつらがやつら自身への苛立ちと勘違いしてくれる。

それが俺にはもの凄く都合がよかつた。

普段の俺のままで相対したら、

日本人の無駄に優しくヘタレな態度でいつたら、
おそらくは俺はあの子供らにどうぞ便利な道具扱いの、生物として下にランクづけされてしまうから。

何じひ俺は知つてゐからな。

多くの日本のお父さんが娘に「お父さんの後のお風呂は嫌!」とか
「お父さんの服と一緒に洗っちゃったから着れない」とか言わ
れても、反抗も出来ない姿を。

で、嫁さんには「ウチのATMがオンボロな件について説明を求む」とか言われちやうどだ。

これがギャグとして笑えないお父さんにはすまないが。

結局なにひ、俺が欲しいのは矛盾だ。

物質的に豊かになれば心が貧しくなる。

慣れたものでは満足できなくなるからだ。

物質的に貧しくなれば心が豊かになる。

空腹は最高の調味料といつわけだ。

優しくすればいずれつけあがるし、

厳しくし続ければいずれ素直になる。

矛盾する存在が欲しい。

少々の光に塗りつぶされない闇を持つている者。

多くの優しい男がそれを奴隸という闇に求める。

そして優しくしきて闇を忘れられ裏切られる。

ほしにほしにほし。

苦しくなれば助けを求め、樂になれば手のひら返す、

流されるだけの石にひたせじへしても意味が無い。

独り立ちできたら途端に疎遠にならぬよひな、

人間である努力をし続けない奴はいらないんだ。

ほしい。

信頼し過ぎても裏切らない友人が欲しい。

権力を与え過ぎても裏切らない部下が欲しい。

優しくし過ぎても裏切らない女性が欲しい。

欲しい。

幸せになれない人間が欲しい。

幸せに慣れない人間が。

俺は、

俺のようこ、

口口口に薄れない闇の釘が刺さつてゐ、

人に裏切られまくつて、それでも人であることをやめない奴が欲し

いん
だ
よ。

窓に小石ぶつけるとか、なんてベタな連絡方法を。

「子猫様は……寝てますね……」

置いといで、とりあえず表に出るか。

小さなガキに袖を掴まれ、「こひこひ」と案内されて廃屋らしきボロすぎの建物へと連れられてきた。

（広さんは結構大きいな、ガキどもが寝泊りしてるのかね。その辺の事情も全部聞きださないと）

「よつ

「…………」

思つたよりは荒れていない室内の、奥でたたずむフードをかぶつたおそれく昨日のイケメンガキだと思われる人物に声をかける。

「何だ？ だんまりか

「…………

「まいい、まずお前らだ。お前らの情報が欲しい。いや、その前に今にも死にそうな奴はいるのか？ そちらからこじよつ。手駒が少なくなるのは避けたい」

「信用…………

「あん？」

「信用できない…………

「なんだ？ 僕がその病人に会つて、何かすると思つてるのか？」

「…………

「何をするつてんだ？ 身包み剥ぐのか？ 殴つて痛めつけるとか？ それとも引導でもわたすつてか？」

「…………

「…………つたく、MPの無駄遣いは避けたいんだが仕方ねえ。ほら、よく見とけ 百の神の慈悲と千の眷属の業が我が手に宿る。

マイナーヒール

呪文の詠唱と共に俺の右手がぼつと柔らかい光で包まれる。その光

は傍目に見ても心の安らぐ癒しの雰囲気が感じられた。

ちなみに呪文は補佐、つまり発動と安定とMP消費を抑えるだけで、それそのものに効果はない。あくまで呪文無しで使える者の助けにしかならない。

「治癒……術……そん……な……」

「ふつ。驚いてやがる。そりゃそりゃだらうな。

治癒師のクラスなんて下手すりや1万人にひとりの割合でしか持つていない。

しかも見つかった時点でエリートコースに乗つて、もう一度と平民の世界には戻つてこない。

神殿の権威を保つ虎の子として確保されるんだ。

「あつ……はやく！」

途端に俺の腕を取つて外へと走り出すガキンちよ。

やれやれ、忙しいこつた。

おこおい、俺が案内しろと言つたのは、死にそつた奴だぞ？

死人じやねえ……………と言いたくなるぐらい、私死んでますよな雰囲気を醸し出してる人が目の前にいますよ。

傍らに居るのは例の巨乳ちゃん。なるほどこの子の母親ね。

父親の影はなさうだなーっと。

ふむ、予想のひとつ、父親がダンジョンから戻つてこない、そして生活苦つてパターンか。

他にも、こいつらの境遇を色々予想はしていたが。

単純にストリートチルドレンの集まりとか、亜人で差別されて職に就けないとか。

とこづかさ、この親子の耳かわええええ……

猫耳というか、もうね、めっちゃかつてこい。めがつた。ちよこんつてついてるのー。

外側が真っ黒で中が真っ白の猫耳が、子猫サイズでくつついてるわけ。

これは萌えますねーーー。

「お願い……」

おっと、脱線してたわ。気合入れていきますか。

「まかせろ　　百の神の慈悲と千の眷属の業が我が手に宿る。

マイナーヒール」

「百の神の慈悲と千の眷属の業が我が手に宿る。マイナーヒール

「五百の神の慈悲と千の眷属の業が我が手に宿る。マイナーヒール

「五百の神の慈悲と千の眷属の業が我が手に宿る。マイナーヒール

小ヒール連打である。

MMOとかRPGとかだと燃費がいいから安定性重視で使ったりするんだけど。

きつい一撃食らった後にうまく入ればかなーり助かるんだよな。

まさか現実で使つとは。

治癒師のクラスについてから、まあまあの頭数を狩つたのでレベルは上がつてMPも増えているとは思つてたけど、もう一〇回はかけてるのに切れる様子はない。

MP上昇量などのステータス上昇量はクラスランク（村人FだつたらFの部分）によるところが多いので、もしかして俺案外高めのランクなのか。治癒師つてだけでも大事なのに高ランクとか実感わかないが……

幼女神様さままだな。

今回置いてきちゃったけど。

「もう顔色は大分良くなつた。で、ちと聴きたいんだがこの症状はいつからなんだ？ 今まで対処はどうしてた？」

巨乳もといチビ猫耳とイケメンは俺に対する態度を改めた！

さつきから俺へと向ける雰囲気が変化しているのだ。

治癒師のネームバリューすげえ！ と言いたいけど、まあこういふのはその場のノリだ。

ガキはすぐ忘れて調子に乗り出すのは、がきんちょ相手に慣れてる人なら周知の事実だし油断はしない。

「えっと、おかーさん半年前ぐらいから『飯あんまり食べなくなつて。時々ポーションを使ってたけど、少し良くなつて、またすぐ悪

くなつて……」「

「つまり栄養すら取つていなかつたと。ポーションも道具屋の一番安いポーションだら?」「

「うふ。あ、はー……」

と「ぬつ」とせ、

栄養失調の氣もあるが、

旦那さんが「くなつて生きる氣力を失つてゐるとか?」

おまけにお金も充分に稼げない生活に悲観して、それが体調にまで反映してゐる。

他の要因の可能性もあるけど、あつたるな。

幸運なのは、見たところヒールで回復はしていゆつて」とだ。

これなら根本的な原因を改善するまで、その場じのまゝは出来る。

漫画とかみたいてくつと治るのも期待してたが、世の中をつ上手くはいかないか。

心因性とかマイナーあざるわ。パツと治せなくてパツとしねえ。

「今日のところれでいいだろ。それとだ……」

俺はおおげさにジロッとふたりを睨んで告げる。

「俺はじばりくは治癒術が使えることを願したい。だからこのことは口外無用だ。もし漏れたら俺との縁は無くなると思え」

ふたりとも必死に首を縦に振って肯定している。

どうも信用できないんだよな。

核用袋からまだ使っていなかつたポーションを全て取り出して

「また悪くなつたらとつあえずこいつを使え。気休めにはなるはずだ」

ヒールもいいんだが出来るだけ田立ちたくは無い。

なうじこいつらには出来る限り普通のポーションを使ってもうひがいいだろ。

俺が直接動くリスクも低くなる。

ああ、そうだ。

俺はまだ道具屋でポーションを5つしか買ってない。

なら今後はあそこで継続的に買って、それを横流しするのがよさそうだ。

これなら迷宮に入ってるのに殆どポーションを使わない不自然さも誤魔化せん。

いい案だ。

「さて
容体が危なそうな奴はまだいるのか？」

「よつ、買取だよな？」

「ええ、結構多いです」

俺はさもなんでもないのに事前に考えていたセリフを口に出す。

「おいおい、随分多いな。全部パープルウルフか」

「最初は手間取つたけど、もう慣れました。コツ掴めば簡単ですよ」

「ほつ……」

そつ、俺はもうパープルウルフをほほ手間要らずで倒せる。

走つて蹴る。ただそれだけだ。

指弾すら使わない。

「しかし頑張つてゐな。これで3日分ぐらいだ。あまり無茶すん

な

(…………半日分だよ)

パープルウルフの狩場は不人気で殆ど人がいない。

半人前がいけば群がるように逆に狩られるし、

狩れる実力のある人間だとウルフが寄つてこないと「ジレンマ狩場だからだ。

あんな狩場にこもる物好きは俺か馬鹿ぐらいだらう。

それと本当は一日分の核があるのだが、

今回は問題にならない程度の量を持つてきてある。

様子を見るためだ。

やはり話の感じから、全部をいつきに持つてみると問題が起つた
気がする。

「なあ、坊主は格闘家だろ」

「ん……何でわかったんです?」

「まず装備が何もないじゃねえか」

「……まあ、確かにそうですね」

「感じから魔法使いってこともあるが杖も持つてない、ローブも着てない。第一これだけの量を狩るにはMPが持たないはずだ。」

「……」

「しかしまさかパープルウルフに追いつけるわけもないし、どんな方法で狩つてんだ?」

（はあ、やっぱ本職だな。誤魔化しにへいわ……）

「あー、まあ、不意打ちみたいなものです」

（やつ、逃げる前に蹴り倒してんだけどな……）

「ああ、別に詮索してるわけじゃねえんだよ。ギルドとしても期待のルーキーの情報ぐらいは知つておきたいからな。そんな深くは考えるな」

「うーん」

（これはあれですね、Aランクだと特典がつくけど強制徴兵、Bランクだと何もなしつていうお約束の）

「ま、大抵は伸び悩んで鍛冶場で終わつてしまつんだけどな。坊主はそつないよう頑張れ」

「鍛冶場？」

「5階のこいつた。1階の階段の底が深いほうに降りればわかるぞ」「あうですか……」

（ふーん、鍛冶場ねえ……）

俺は今、核 それも狩りすぎて買い取りに出しにくくいものを
使って色々と計画を練つてゐる。

実は、ギルドで核を買い取つてるのは、ボランティアとかサービスとかではなく。

これを使用して魔道具を動かすためだ。

例えば、転移用魔法陣ポータルにも核が使用されている。

ギルドで買い取られた核は主に王都に輸出されているらしい。

そんなに大規模に何に使つてゐんだろうな、とは思うんだが。

それは今は置いておいて。

核と言つるのは魔力の塊。

それも攻撃魔法というか瘴気となつて歪んだもの。

魔物自体が歪んだ魔法で出来てゐるが故に、倒した後はいづれ霧の

よつに消滅する。

核を残して。

既存の魔道具の中にはそれをセットして動くものがあるのだが、

実際に動かすには、魔力を清浄化してからでしか使えない。

当然の「」とく、核を直接セットして魔力を補充する魔道具にはこの清浄変換回路というものが用いられているらしい。

それで魔道具屋でこの核を直接セットして使える魔灯が売っているのだが。

鍊金術師や細工師のクラスを得てからそれなりにレベルはあげた。

そこでこの魔道具を手に入れて、分解解析して、仕組みを学ぶ予定だ。

ただ……

たけえ・・・20万するし。

まあ無駄遣いしなければすぐに買えるだらう。

分解して解析して研究して、そして何もわからなかつたら20万が飛んでいく。

アハハ……飛んでいく、ヒラヒラと

ま、それは仕方ない。

んで、核を使った魔道具の作り方がわかれれば複製して色々な魔道具の大量生産。

それを使って考えているのは、夜のダンジョンをあいつらの占有にすること。

昼じゃなく、陰の存在を集めて夜のダンジョンの世界を支配するつてやつだ。

中一臭い話だけど。

今まで広場で昼間のガキどもがいない時間しか狩れなかつたらしが、

スライムに特化したような装備と灯りさえ用意できれば、案外簡単に広場以外でも狩れる筈。

装備も鍛冶師のクラスのスキルの手慣らし程度に作つてやればいい。

「うーうー

「どうしたんですか？ 幼女神様」

「ん~」

俺の膝の上で、人間バージョンで何やらじろじろしている。

今日は幼女モードというより幼児モードだ。

妙に甘えてくるのである。

服とかひつぱらないで~

のびのやうから~

まあこりんなゆつくりな時間も、たまにはいいか。

「う~ん。高いっ！」

「ハハハハ。商売の邪魔しちゃダメでしょ」

ダンジョン街の片隅。

例の魔道具屋の前で俺はぐだを巻いていた。道具屋ではなく。

「これを1ルトにまけてください……」

捨てられた子犬のようなつぶらな瞳をキラキラと輝かせて、俺としては控えめなお願いを店主のお姉さん（フードで顔はわからな）にしてみる。

あ、元の値段はちなみに100万ルトだ。あくまで元。

「1ルトだけならまけてもいいわよ？」

なんというか「お姉さん、どうなく感じが良くて話しゃすい。

「安い中古品とかはありません?」

「無いわねー」

「ガックシ

そもそも魔道具は王都の魔道研究院での専売で、許可を得た店舗以外での販売は厳重に禁止されている。うしい。

中古も外装をかえれば簡単に新品になるらしい。

新品と同じ値段で売れるのにわざわざ中古品と叫ばる必要はない。

技術隠蔽で専売。なんともまああからさまな。

だがそれはそれでよい。

技術は学んで、見て、盗んでこそ華!

店内でも一番目立つ正面真上の壁に、大きな魔道具特有の文様が描かれた剣が飾つてあり、俺はボーッとその剣に目を奪われる。

「魔剣かー」

「1500万ルトよ。買つの？」

……買えるわけがないじゃないですか。

しかしお姉さんは何故か尻尾を振るよつた、今にも買つを期待してるよつた喜びの反応を見せてくる。

まあ確かにこれが売れれば貴方はボロ儲けだとは思いますがね。

「何か、あなたは魔道具が欲しいといつより、魔道具が純粋に好きつて感じよね」

そりやそーですよ。理系人間舐めたらいけません。

「魔道具の魔改造とか萌えるじゃないですか」

「魔改造つて……なんとなく意味はわかるけど、不穏な響き。よつわ~」

あんたのほうが不穏だよ。ミステリアスといつより怪しひいといい霧囲気発散してるんだぜ。しつてたかい？

「よおし、おねえちゃん、ボクちゃんのこと気に入つちやつたわ。この本を貸してあげる」

「本？」

手にしているのはすこしきこぼけた感じの、カバーに金の装飾が入った分厚い本だ。

「基礎魔道具概要、古典的な魔道具に関する名著よ。わたしが若いときに勉強のために使っていた本ね」

「おおおー。魔道具に関する本って初めて見ました……」

「……それはそうよ。市販すらされていないんだから」

「へえ……」

魔道具関連本は市販品じゃない?

何か裏がありそうだな。

まあなんにせよ、貴重な本ってのはわかつた。

大事に扱うとするか。

いや、こゝはあくまで、使い倒す氣で扱おう。

それが本当の意味での大事にするひとことだから……

これも錬金術師や細工師クラスのお導き。

ありがたく運命を受け取ろう。うんうん。

ぴーーん！

主人公が 魔改造への招待 魔道具改造講座 を手に入れた！

「シッ！」

キング「ブラのように上体を起こして、

ゆらゆらと攻撃のチャンスを狙つ オロチピール の懷に無造作に飛び込む。

オロチは4階の魔物で大型の蛇系統の姿をしている。

咬まれると時々毒状態になるという嫌な敵だ。

だが、攻撃が来ることがほぼわかつて、いるから対処はできる。

ボクシングで言うバーリングの応用、

ビンタのような感じで一回だけ攻撃を反らせば後は簡単、

首に近い部分を掴みこんで締め上げ、胴体には体重を込めたキックを食らわし、まくつて終わり。

が、タイミングを見誤れば当然大打撃を受ける。

更に毒にかかる可能性もあるシビアな敵。

「パープルウルフよりも厄介だなー。リズム良く狩れないし」

この敵は攻撃態勢のときは足が動かないから攻撃範囲が狭い分、その攻撃は非常に鋭い。

その見極めに神経を使うので、パープルウルフの時のように狩場を縦横無尽に駆け巡ることは出来ない。

それにここにはたまに剣を使って狩りをしている人も居て、目立たたくない、邪魔されたくない、見られたくない俺にはどうとも美味しいは無い狩場だ。

それと何故見た目剣士が多いのかといつて、ここからは剣で狩るのが比較的楽だからだ。

なにしろ交戦時は、オロチはまるで上に向かってまっすぐ立つて、いる棒のようなもの。

攻撃時も結局は胴体」とくるので、剣で立ち木を断つように振れば、迫り来るオロチの頭を妨害する形にもなる。

剣士からすればオロチの首が攻撃範囲に突っ込んでくるようなものだから、例えアタマが迫ってきててもオタオタする必要も無いわけだ。

しかし剣士に良いことばかりでもなく、ここからは鱗が硬い。

そこで、実力不足であるとうまく切れずに逆に競り負けて、咬まれた拳句全身に絡みつかれて締め上げられて命を失う。

一度だけ人が飲み込まれていくのを見たことがあるのだが筆舌に及ぶしがたい光景だった。

そこまではいかないにしてもこの街では冒険者が大金を稼ぐことでの関連する武器類も当然高くなり、研ぎなおしにもまたそれなりの金がかかる。

何事もやつまくはいかないということだ。

（パープルウルフは楽なんだけど、あいつらだけ狩っていると格闘というよりも蹴鞠に近くて。敵との交戦時のタイミングをとる、避けるという基本的な駆け引きの能力が育たないというか勘が鈍るというか）

蹴りを叩き込みまくつてぐつたりとなつたオロチの後頭部のふくらみ。

まるで咽喉仏のように盛り上がつたそこをぐつと掴んで、身体能力任せでもぎりとると、

中から艶やかな瑠璃色の球体があらわれる。

それを手馴れた感じで核用袋へとポイっと投げ入れ、次の獲物に移る。

敵はまばらだがそれなりに広い狩場で他の人の接触を避けながらちやくちやくと狩つていく。

これで50といつたところか。

後100ほど狩つておしまいにするか。

そう言えば次は5階、買取のおっちゃんが言つてた鍛冶場とやらか。

最近は俺の泊まっているファンシー宿屋のそばに常駐の子供のひとりが待機している。

俺が迷宮から出たとき、帰ってきたとき、連絡をつけるとき等、密に交流が出来るようにしているからだ。

また買い物に出かけたりするときにはその子供に案内を頼んだりして一緒についてきてもらい、その際に色々と話し込んで情報を引き出す。

一緒に買い物をして小遣いとして核も渡したりする。

これらのせいで徐々にこの街の情報と、あいつらの顔ぶれを覚えていってこる。

今は少しやつらとの付き合い方を変えた。

代表者であるイケメンやチビ猫耳巨乳には通常はきびしく、時に大胆に利益を取る。

他の小さい子供には、それが少人数の場合は時々優しくと父親や兄がわりのよづに接し、

しかし人数が揃っているときには威儀を保つため怒るような口調を使う。

集団相手が一番暴走が恐ろしく、制御力が必要だからだ。

それに少人数の時の対応での、優しくした個々の相手の気の緩みを正すのにも役に立つ。

「ほんとにーーのーー？」

「ああ、買ってやつたんだ。あたりまえだろ?」

「ありがとー!」

こちらを振り返りつつもタタッとかけていく小さな女の子。

日中は口差しが強いので、ここだと帽子は結構必需品なのだが、

この子の帽子があまりにもボロ過ぎたので洋服屋で安くてデザインの悪いものを選んで渡したのだが、気に入つてはくれたようだ。
関わる人数が多くなると、いろいろとトラブルが増えるようだが、なんとかうまくやつている。

「 セウ いえ ばお前の名前なんだつたか」

「ジルです」

「ああ、セウ、セウだつたな。じる か」

「あつてはいるのですが何か少し違つよつた感じがしまやすけど」

「ん? 汁 だよな?」

「えつと、せい……」

汁は少し納得がいかないよう首をかしげている。

ふつふつふ。当然だ。この呼び方には呪いがかかっているからな!

まー、イケメンとかカッコいい名前とか使って呼んでもると精神が微妙に削れてくるから、この呼び方が丁度良いや。

「で、お前は?」

「カフフです」

「カフフ……つひじみにくじ名前だな」

「別にその必要は……」

「ああ、可愛くて良い感じの名前だ」

「……」

「そりいえば母親の様子はどうだ？」

「あつ、最近は良くなっています。顔色もいいし、言葉数も多くなつて。なんでも夢の中で天使さまをみたとかで」

（……マイナーヒール連打でそういう雰囲気に包まれた影響……とかかねえ。俺には宗教とかにはまる、よく日本でいた新興宗教の信徒のあの雰囲気は理解しにくいが。まあ生きる気力になるなら一時的にはそれでもいいか）

しかし、汁^{じる}とカフェ、つまり味噌汁とコーヒーってこつたな。

両方、飲み物系かよ。

「いらっしゃい。いつものかじら?」

「ええ、お願こしまや」

綺麗なお姉さんの道具屋。

初回は失態をしたが、まあ別に気にせぬ何も無かつたように利用している。

あくまで知らぬ存じぬで押し通した。

いつもひとつこののはガキで渡すポーションを俺がいつも使つてゐる
ように偽装してこら奴だ。

俺はついでに、何か事前に用意しておいたほうがよい物、いざれ使
うものが無いかと店内を物色する。

そうしてみると何故かいつもとは違ひ、お姉さんの視線を妙に感じ
る。

特に嫌な感じのものではないので放つておいたが。

「はい、ポーション10個で一万ルトよ」

一万ルトを支払い商品を受け取ろうとする俺。

そこで違和感を感じ、素早く商品を奪い取り、身を引く。

残されたのはお姉さんの両手。

俺の手を下から握りつとめるのを見事にかわした姿になった。

それはもうスカッと。

スカッと。

「私の握手攻撃をかわすとは……やるわね

「攻撃ですか」

物騒な。まあ確かに健全な男には攻撃力が高そうだが。

「う~ん

「どうかしました?」

「なにかもう、最初に来たときは随分雰囲気が違つて落ち着いて見えるけど何かあったの？」

「いえ、別に……」

（あの深夜の1階の広場を見て、この街と住人に早くも失望したからだろうな。まあ俺の女性への態度はもともとどうでもいい気分任せだが）

「まったく男の子はすぐ成長するのね。お姉さん嬉しいやら悲しいやら」

「…………」

「またこりつしゃい」

「ええ

あ、ちなみに子猫様は俺の上着に縫いつけたポケットの中に寝て居る。

細工師のクラスのせいか無駄に綺麗に仕上がったポッケの中。

最近は寝ることが多くなつた気がする。

食欲はいつも通り旺盛だけビ。

第30話 乞食

掘る！ 掘る！ 掘る！

落ち葉や細かい枯れ木をかける！ かける！

粘土のでつかいボールを綺麗に並べて置く（今回は七つ用意しました）

更に上にも落ち葉や細かい枯れ木をいっぱいかける！

後は火をつけて3時間ぐらい待つだけ！

今、街の郊外の河の近く。

幼女神様と水遊びに来ています。

まあ他にも色々遊び道具持つてきていますが。

今日は人間バージョンです。

ちなみに俺が細工師の能力を活用してつくり、花染めのピンクつ

ぼい色のローブを着せています。

「えへへ~」

そんな無邪気な顔で笑いながら水をかけてくるのはやめてくれませんか……

つていうか。

幼女神様、さも当然のように水の上を歩かないでくださいー！

あ、もうわかつてる人はわかつてるはずですが。

粘土のボールは乞食鶏です。別名富貴鶏ともいつけど。

でも俺は富貴鶏の名前は認めません。

カツ「いいじゃないですか、乞食鶏という名前は。

富貴鶏とか自分でお金持ちだとか言つちやう恥ずかしい人みたいで

す。

むしろ「食」と自分で言へるすがすがしさこそ値千金。

「食」の「コア」ансスがある料理が、「こんなにも」とい。

その落差が特に別の意味で味があると感じさせるのである。

「」の風情は非常に日本的精神だと呼べるだらう。

「ま～だ～？」

「ええ、まだです」

「もーいーーー？」

「まだです……」

（もう2時間は経つてゐし、ひとつぐらい味見してもいいかな。案外火が完全に通るよりもジューシーに仕上がっているかもしけん）

「おーにこちやん、まあだあ～？」

「うーん、じゃあもういこですよ。1個だけですが」

完全に猛々としていた火が消えて熾火状態の灰の中からシャベルを
使ってひとつを掘り出す。

「さて、お嬢様。割りますか、割りませんか？」

「割る~」

差し出したトンカチを手に取る幼女神様。

（ちょっと心配だなあ、割れないならいいけど爆散してクレーター
とか出来たらどうしよう……スペックがまつたくの計算不能！）

「えい！」

おお。見事ですお嬢様。心配不要でしたね。

早速まわりの粘土と包んだ葉っぱを除いて切り分けて器に取る。

「はむっ」

後はこの鶏がらスープも用意して……これは半分ほど食べた後、器
にかけて味や食感に変化を出して流し込むために用意した。

「 もう食べることですか。では俺も

「 お~いし~い~

「 いや、まだ熱いですって。アツ~」

お嬢様はたくさん食べてしまつておられますが……俺上りつも。

5階の魔物、ピッグタートル。

ピッグではなくピッグである。豚龜。

5階にたどり着いてすぐ響く打撃音。

しかもそれが無数に響き渡っている。

ガンガン、ガンガンとも一う非常にひるむせい。

確かに鍛冶場と呼ばれるだけはある。

しかしそれとは別に。

何十人もの奇異の視線が最低にウルサイなんだよ。

ピッグタートルはとにかく硬いのが特徴の魔物。

その硬さは既にても等しいといつ話である。

しかし反面、攻撃力は控えめで。

この狩場ではまず人が死ぬようなことは起きない。

では、この狩場はうまい狩場なのか？つときかれると、

ある種類の人にはうまく。

ある種類の人にはうまくないといえる。

つまりると、この5階は1階の広場と同じなのだ。

クラスランクが低い人間は、誰もがレベルを上げても殆どステータスがあがらない。

例えば村人FがレベルがあがるとHPが1か2上がるとして。

これ以上なくレベルあげに時間をうつこんでも、レベル1の時と変わるのはHPの最大値のみ。

それ以外は最高に運がよければ何かの値が1上がるという程度のものである。

そんなことが背景にあるから才能が低ランクの場合、

頑張って経験を増やすよりも、安全確実な狩りこそが最も望まれる対象なのだ。

そして人間の中でも比較的大多数のその低ランクの存在に対し、

それを実現する狩場が非常に少ないという現実がある。

結果としてその低ランク用狩場は低ランクの人間で飽和し、そしてその狩場に運良く残った中ですら獲物の取り合いでも争いが起こる。

いや、ホントに美味しい狩場だわ。

なにしきこくらでも安全に狩れるのだから。

そのくせ結構金になるところだからたまらない。

おまけに助け合いつていう人間性を捨てることまで簡単に出来る素晴らしい狩場だわ。

そり……簡単に。

こんな言葉使いたくないけどホント糞つたれだ。

俺は無心で、いや無心になるよつに、

奇異と敵意の視線をいくつも受けながら5階を歩きまわる。

5階には本当に多くの人がひしめきあつていた。

その雰囲気から判断すれば、

元々人と争うことが非常に大好きな人

自分は働かずお零れを得ようと必死な人

ただ多くの他人と同じことをすれば正しいと断定し何も考えず狩つ
ている人

そして疑問を持ちながらもどうしてもここで狩らざるをえない守る
ものを持っている人

そうして6階への階段と4階への階段の連絡を確認してから

多分俺が狩ることはもう永久に無いであろう場を後にした。

通常、戦闘系のクラスを持っていない、もしくはそれのランクが低いものはこのダンジョンでは5階で詰むと言つ。

どれだけ良い武器を持っていても、6階と並ぶものは魔物の住む階と言われる。

そもそもどこもダンジョンは魔物だらけだが。

あえて言つながら、精神の中の魔物、死の恐怖をあおられるほど厳しい階といつゝとか。

6階を通りものの半端な強さの人間の多くは、

もしくは魔狩場にあぶれて4階では満足しきず上位階に移動しようとすむものは、

出来るだけ重装備をしてマートを組んでから突破するのが定例らしい。

そこで俺が出した結論としては、今無理に6階に行つても得られる物は少ないと言つこと。

しばらくは3階のパークルウルフ魔狩りで様子を見て、レベルや装

備やスキルやらを整えてからと、連田のよつと自分ですら呆れる程の数のパープルウルフを狩っていた。

「ハハツ！」

笑い声では無く掛け声である。

ちなみにハに1回の蹴りが対応している、ただの2連撃だ。

俺の田の前の道には、一面に無数の核が転がっている。

何故こうなったかと言つと、

最初は「もう核なんてとるの面倒じゃね？」

ということでレベルあげを重視で、人のめつたに来ない4階奥の袋小路近くで一心不乱に狩つていた。

そうするとだ、なんと！ ある程度時間が経つた魔物の死体は核だけ残して消えているではないか。

そしてそれを拾いながら時々沸く魔物を個別に倒している。というわけだ。

今更だけど これっていちこちももつとるよつ早こよね？

「ハツ！……ん？」

反射的に蹴りを入れたパープルウルフ、

いや、そういうには色が黒すぎて体躯が小さい個体。

それはほぼ確実にパープルウルフを一撃で倒してきた俺の蹴りを受けても

わずかによろめきながら立つてきて、一いつひらくと攻撃をしてきた。

「なんーー！ つと

戸惑いながらももう一度蹴りを入れる。

今度は立ち上がりこなつたが、それでもまだ息はあるようだ。

「なんなんだ？ これ……」

俺は震える黒い小さな個体を上から見下ろし疑問の声を呟く。

そして幼女神様も興味を持たれたのかポケットから顔を出してくる。

『あつ、この「地獸」だ~』

『ん? 地獸ってなんですか?』

『たまーにでてく~』なの

『レア~ですか。幼女神様、倒しちゃダメだった?』

『たまに属性が聖に反転するの~』

『じゃあ、良い魔物ってこと?』

『うさ! その「聖獸」とか天獸とか神獸になるー』

『ええ~、じゃあ俺そ~なったときに仕返しだれる? では……』

『だいじょぶ。ほらー!』

子猫さまの田線の先には、れきせびの黒い小さな狼が這い蹲りながらも、尻尾を振って仲間にして欲しそうな眼でこちらを見ている。

『たぶんたおして殺さなかつたからー!』

『んー、負けたのは自分が弱いせいだと思つてるから恨まないで、なおかつ殺さなかつたことで感謝、いや平伏してることかな』

『うんづく』

『そういう精神なら確かに邪じやなく聖にちかいのか。なんか急展開だがとりあえず回復してあげとこ』

「おーい、おちびー、動くなよ？」
　　百の神の慈悲と千の眷属
の業が我が手に宿る。マイナーヒール

「いい、脚の周り走つてちや俺が動けないって」

《めつ》

俺と幼女神様にしかられたチビはきゅーんと鳴いて反省してくるー。

俺と幼女神様にしかられたチビはきゅーんと鳴いて反省してくるー。

チビじやこへりなんでもだし、なんかた、その名前付けたら逆に大きくならうなジンクスといつか……

じゃあ黒にしてよう一つヒヒとドモ、大きくなると色が変化したりとか。

確實にあつそうだよね————！

「つーむ、ねあび、こや」ひびとかびつだらり……

「へーーーん」

「つむ、じちびでいいか

スリスリと俺の脇に首を撫で付けるこちび。

中々可憐いではないか。

しかしだ。

よくRPGなんかでこういつのが戦闘の補助をしてくれるんだけど

タフさはここの魔物より高いけど、戦えるかつていうとどうかな。

オロチとかいくともう一飲みこされそつだし、危なつかしいわ。

こちびがグッタリして飲まれる様子とか考えたくも無い。

レベルあがると強くなったり、大きく変態するのかね。

ならスライムからこ今までの敵を倒させてみるつてのもあつか。

俺が散らばっている核を摘んでいると、こちびも尻尾を振り振りあつちこつちと核をくわえてきては俺の前に置いていく。

「おおー、じちび超偉い！ 頭良いな～

「ぐーん」

こ・れ・は！

核の拾い集めスピードアップではないか！

たどたどしくて、一生懸命なのも萌える！

更にお手伝いスキルがレベルアップして直接核用袋に入れてくれればその間狩れるし、大助かりなんだけどな。

そこまでは無理だろ。

いや、そうか。

ここには無理がなさそうな方が居るじゃないですか。

『幼女神様、こちびに念話で色々教えることできます?』

『うん!』

『もう万能ですね……じゃあ袋に直接入れると、近くに無くなつたら袋を落ちてる場所に移動させるのを頼みます』

『ふりん!』

『むつ、それを要求しますか。プリン気に入つたんですね』

『にへへ～』

『わかりました。帰つたら家に転移させて貰つて作ります、ですか
ら頼みますよ』

『もう終わつてゐるもん』

『返事を聞く前に終わらせてゐるとは。お嬢様、それでは下々のもの
とは交渉は成功しませんよ、お嬢様らしこと言えぱりしこですが』

『ふーりーん～』

『わたくしめが責任を持つて用意致しますのでー』

プリン、それは洋風茶碗蒸し！

へ？

間違つてないよ？

水の代わりにミルク入れて、砂糖味にするだけで基本できぬし。

簡単簡単！

牛乳と卵黄と砂糖だけでできるんだから。

さあ君も冷蔵庫から材料をちゅうまかしてトライ！

適当に混ぜた後、そのままベロッと味見して調整。

出来れば田の細かい茶漉しで漉しておくと滑りが度つっぷ。

それを良く洗つたコップに注いで、ご飯保温中の電子ジャーに入れとけば勝手に出来る。

出来たら冷やすだけだ。

分量？時間？

こまさえことはいいんだよ。

自分の舌を信じて加減しつつ、何度か作れば覚える！

レシピ公開してる人は皆そうやってきたんだから。

気に入つたらカラメルソースも作つてみようぜ！

砂糖水を煮詰めるだけだからな。

「よーし、お前ら、子猫様に拌んだか？ 準備はいいか？」

バケツサイズのプリン五個と子猫さまを中心にがきんじゅうを配置する。

汁やらカフェも田がキラキラしている。

こいつらと出会つてからテーブルに出る食料使つたものとか、乞食鶏とか色々分けてやつたからもう俺の出すものの味はガキども公認だ。

うにゅーん祈りでジユバツと出でくるアレだが最近大量の食料以外もなんかでてきてるんだよ 最初にケンダマとかフリスビーが混じつてたときは一瞬混乱しちまつたぜ。

廃屋の中は比較的広いがもつギュウギュウ詰め。

俺のつくりてやつたマイスペーンと器を手にウズウズしてこの世の衆。

鍊金術の練習で作った純度の低い不出来な鉄をトンカチでカンカンやつてみたのだ。

少し、鍛冶のスキルも上がった気がする。

「よーっし、食べて良いでー、ゆづくじとねよ

おやおやおや、かつ我慢できない感じで次々子供たちがプリンに群がる。

めちゃくちゃにならないのは今までの教育のたまもの。

最初からわけてないのは、子供らの行動を見るためだ。

自分だけじゃなく、他も気遣える、将来の幹部級の選別と言おうか。

例えば汁とかは自分の分よりも先に子供によそつてやり、カフエは自分のを確保してから子供によそつてている。

献身の騎士、安定の文官って感じかな。色々と個性があつて面白い。

俺も周りを見ながら子猫さまとこちびに取り分けてやる。

こちびなんだがコイツは何でも食べる。が、主食は核だ。

なんかやべえパワーアップフラグがたつた予感が！

つて、もう取り分けた分食い終わってるし。

『もつと』

『いやいや、お嬢様の異次元胃袋をここで披露しちゃ いけませんー。』

え？ 幼女神様にもつと食べせり？

ああ、大丈夫ですよ

ええ。

当然、夜のおやつにもつ一個でかいの確保してありますから。

人間バージョンではむはむするところを見たいんでね！

「エルフの髪の毛…………」

寝つゝいがつて子猫様を腹の上、いちびを小脇に魔改造指南の書を
読む俺。

少し古臭い文章に、惑いながらも読み進め、何度も読み返す。

それで 最初にまず必須とあるのが エルフの髪の毛 だ。

だがエルフなんてのはそもそも絶滅したとも言われていて、その髪
の毛など入手できるわけもない。

はじめのあたりこそ「ふーん」という感じで読んでいたが。

中ほどまで読んでもあくまでエルフの髪の毛が手元にある状況でこそ成り立つ技術の話ばかりであり、まったく現実的な取っ掛かりがない。

そういうわけで少しやきもきしている感覚がぬぐえないのだ。

「入手した髪の毛の一端を固定し、それを指でじごくと滑らかに動かせるときと引っかかる時があり、それで魔力の流れる方向を判断することができる、ねえ……ふむ」

俺は当然のように自分の髪の毛を一本抜いて、一方を爪で摘んで、そこから指の腹でじごいてみる。

「おお、俺のでもわかるわ。確かに引っかかる方向がある……これは面白い！」

（ヘルフじゃないが、俺の髪の毛でも微小な効果は期待できるかな？ どうせはじめに作る予定の魔道具は一番簡単そうな魔灯だし なあ）

まずはわずかでも成功の事例が欲しい。

例え豆電球ほどの光しか出なくてもだ。

「ふむふむ、耐熱布に髪の毛で魔陣刺繡を施し、魔力を流すことによって望む効果が発動する、つか。光は真円、風は渦巻き、火は三角、水は器、土は四角を基本としつと……」

うーん。

作る予定の魔道具は魔灯だから？

この場合は 魔陣刺繡と言われる髪の毛で真円の刺繡を施した耐熱布を用意すればいいんだよな？

だが耐熱布なんて入手のつてがないんですけど

どひせ実験で燃えるまですらいかないから普通のでいいかねー。

他にも細かい安全装置やら安定術式の技術が載つてるけど、まいか。後回しで。

なんていうか、日本に居た頃の科学書みたく、何でもかんでも小難しく書いてあるが 結局のところ科学技術に例えてみれば、魔陣刺繡がフライメント、髪の毛が導線、核が電池となる。

そりこりひひひ。うん。

いや、なんじや じつや。

髪の毛を爪でビーッてじーじてみると、くるくる巻き毛になつたらそこに核をくつつけてみたら、核から魔力が流れて風が起きてる

のがわかるんだが。

こんな簡単でいいのか？

しかし、技術なんてこんなもんか。

例えば元の世界の発電だつて、単純なモーター逆回しで出来るもんな。

これつて毛が水路みたいなもので、そこに水を流すと途中で止まつて更に流れるから決壊して、その反応が魔術になるつといつ感じだな。

そりいえばなんか魔法使いになつてから魔力が頭皮とかでビンビン感じられてたのはもしかして髪の毛で空気中の魔力を吸収してたから？

いやminateよ、それだと癖毛の人は頭が扇風機に？

んー、それより前に魔力が頭皮に吸収されるか

じゃあ空気じゃなく核を直接つけてみると……

「つほつ、魔力が来る～」

清浄化機構つてのが無いと効率は悪いらしいが

これはもし

かしてMP使い放題フラグ！

更に魔改造の第一歩を確立して、今日の俺は調子このつてるかもし
れん。

「みーみーーー

「くーーん

「最近おかしいよな……」

何がおかしいかと言つと、昨日魔道具の基礎を理解したと思つたらあつさり魔灯が出来てしまつたのだ。

しかも市販品よりも数段、能力も見た目も上等なものが。

耐熱布なんて必要なかつたわ。丸い棒に巻きつけて固定しただけで出来た。

魔道具屋で一度実演してもらつた魔灯より3倍ぐらい明るいし。

更に見た目は、こんな感じのがセンスいいかなーとか言いながら細工してたらイメージ以上のものができた。

能力は鍊金術師の理解力と技術、見た目は細工師や鍛冶師の匠の技。

レベルを上げれば能力がついてくるのはわかるが、あつさりと出るどなんというかピンとこない、納得できない部分がある。

俺の色んな過去の努力はなんだつたのか、と。

まあそれはいい。まだクラスの恩恵で理解できるから。

更におかしいのはエルフの髪の毛じゃなく俺の髪の毛で作ってるのに、オリジナルより能力が高いってことだ。

思つに、エルフの髪の毛はエルフそのものが魔法のセンスが高く、髪の毛の魔力の伝導率も高いのだ。

ということはだ、エルフではなくランクの高い魔法使いの髪の毛でも代用できるってことだ。

そして本に載つてゐる通りに作つてゐるのに、俺の魔灯がオリジナルの光量を超えるつてことは、エルフの髪の毛よりも俺の髪の毛の方が魔力の伝導率に勝つてゐること。

魔道具屋で見たものが同じ機構ともエルフの髪の毛が使われてるとも限らないが。

で つまり俺の魔法使いのランクは相当高いつて予想にたどりつく。

そういうえば最近は ライト が異様に眩しくなつたんで調整しながらやつてるけど。

格闘がMPいらずの使い勝手最高だつたんで試してないが、今度から魔法も狩りに使ってみるか。

さて次は すらいむばすたー（棒読み） の起案にとりかかるぜー！

深夜、丁度ガキラの狩りが始まる時間に呼びにこいといい、今、例の広場についた。

「あの、今日は何を……」

「ああ、ちょっと待て」

お手製の魔灯を取り出し、パープルウルフの核をセットする。

たちまちのうちに薄暗い広間は少しまばゆいぐらいの光に照りされた。

驚くガキラを尻目に、まとめ役2人とガキどもを促し、広間より奥の道へと移動する。

ちなみに広間の既存の魔灯はガキラには触ることが出来ない。

これも核を入れれば使用できるようだが、流石に高価な値段の魔道具を気安く使用したり、取り外されたりしないように厳重に力ギがかかるつている。

そりやそうだ。核を入れる部分なんて機構の中核だからな。

がきども全員を広間以降に連れようとしてるのだが、どうも様子が

おかしい。

怯えている子供までいる。

一応わけを聴いてみるとやつぱりと言えばやつぱりか、

何度も広場以降へと狩場を拡大しようとしたが、最初はうまくいつてて、

そして油断して2人が死んだ。そしてそれっきりらしい。

（トライアマカ……）

だが精神に傷があるといつてもそれを許すわけにはいかない。

優しい人間に説得されて、戦場にいき死んでいく人間は少ないが、

徴兵と言う権力が背景の暴力で、戦場にいき死んでいく人間は数知れなく居る。

優しさと言つものは本当に弱い。

今は俺の言つことを聞いている」つらも

ほんのわずかなきつかけで反抗をする。

全員に優しくし続けるなんて個別に対応するのは不可能に近い。

暴力は本当に強い。

内心ではどれだけ文句を言おうが、

一度命令されれば忠実な機械となる兵たち。

どんな人間も肉体への暴力には抗えない。

たまに反抗する人間も、死んでしまえば逆に他へ見せしめとなる。

とはいって、それはあくまで行使する側が圧倒的な力を持っているからだ。

最も重要なのは、理解できていないから。

何故、自らがこうなったのかが。

結局、敵の大きさがわかつてないだけだ。

そしてそれに対応する気構えも足りない。

敵が自分の想定した大きさでなければすぐ逃げてしまう者ばかりだから。

闘つ者に、敵を前にした不明や撤退など必要ないんだ。

だから、俺が本当の敵の姿、現実と言つものを見せてやらなこと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9140z/>

ウチの倉庫の地下に神殿がある件について説明を求む

2012年1月5日21時06分発行